個人として、人間の幸福や、團體としての人間の幸福を增進せしむる爲めに存在するものであるからして、人間の幸福そのものを犧牲にしてまでも、文學をやらなければならぬ理由が無いのである。

之に反して、文學、弘く云へば、文藝の尊嚴と其獨立とを認める人の場合には、前に掲げた問題が、實際の問題とならぬこともないのである。即ち、立派なる文學者となる爲めに、立派なる文學上の作品を得る爲めに、從つて人生に對する、深くして且つ廣き經驗を獲る爲に、故らに自家の幸福を犧牲にすると云ふことも、さう馬鹿げた考でないやうに、一應は考へられるかも知らぬと思ふ。

が、自分は之に對して判然たる答をなして、人は文學者となる爲めに、自ら人生の苦い經驗を求むるの必要はないと云はう。なぜ必要がないかと云ふ

に、人若し故らに苦い經驗をしようとするのは、其自體に於て矛盾した話である。避けたい、逃れたいと思つても、逃れられず、避けられぬものなればこそ、苦い經驗なのだ。自ら求めて經驗するものは、經驗すまいと思へば、經驗せずに置けるものなのだ。それをどうして苦い經驗と云ふことが出來よう、どうして痛切に苦い經驗と云へやうぞ。

人生の暗黑なる方面を見る爲めだと云つて、金持が貧乏人の眞似をして、貧乏人と同じやうな、きたない着物をきたり、まづい物をたべたりしたところでさう云ふわざとらしい經驗を、どうして痛切に苦い經驗と云へやうぞ。ほんとうに持つてる金をすてゝ仕舞つて、ほんとうの貧乏人になつたなら、その時こそ隨分苦い經驗にもなるかは知らぬが、さう云ふ呑氣なことの出來る境遇に居る人は、本來世界一の果報者である、それ丈けの幸福なる生涯を

人力で以て破壞し得らるべきものでない。

本來身體の丈夫な人が、苦い經驗をする爲めと云ふので、わざ〳〵不養生をして病氣になつたとする。そんなことをするものが、もとより實際にあらう筈はあるまいけれど、今假りにあつたとする。それが果して痛切なる經驗と云ふものであらうか。自分はこれほど滑稽なる經驗はあるまいと思ふ。

また假りに、大文學者となる爲め、大に人生に觸れる爲めとあつて、元來謹直な人が、わざ〳〵放蕩でもしようと云ひ出したなら、どうであらう。人生に觸れんが爲めと單に號するのみならば不思議もないが、もし眞にさう思つて居る人があつたらば、どうであらう。世の中に是ほど馬鹿げた考は恐らくあるまい。色は思案の外と云ふ、思ふに放蕩もまた分別の外である。或る一定の目的を立てゝ、冷靜なる打算の下に、歌舞の巷に入り、紅燈綠酒の間に

醉臥すと云ふ、放蕩は即ちだゞ形式丈けである、由良さんの女郎買と何の選ぶところぞ。

惑溺の世界を見むとするものは、自ら身を泥土(どぶどろ)のやうな人生の暗黑面に沈めなければならぬ、否な、沈められた人でなければ、惑溺の世界は解らないのだ。

人が寫生帳を懷にして出掛けるやうなところに、深刻なる人生の意義が轉がつて居るものではない。寫世帳を懷にしながら、人生の苦い經驗をしようとするのは、書齋の中から人世を見ようとするに異らぬ。人生の形式を見て遂に內容に及ばないのである。

寫生と云ふことは、文學美術の上に大切なる作用たることは勿論ながら、それは單に人生の極めて實想的なる形骸を表現するに過ぎないもので、人生

根本の經驗を之に須つことは出來ない。もし此寫生と云ふものに非常に重大なる價値を附し、是れ丈けで、よく人生の最も深刻なる意義を捕捉し得られるものゝやうに考へる人があるならば、それは誠に氣の毒な人である。

古來の大詩人大文豪と云はれる人の傳記を見るに、大抵は不遇の人である不幸の人である。貧乏もした、失戀もした、また實に放浪もした。その他種々なる方面に於て數奇なる生涯を送つたものが多い。中には境遇の壓迫の爲めに、或は先天の性格に原因して、墮落もした、罪惡も犯した。それを悔いて、再びまた煩悶もし、懊惱もした。ダンテもさうである。ゲエテやシラアもさうである。バイロンやシエレもさうである。しかして彼等の苦い經驗は彼等が故らに求めたものではない、少くとも文學者たるべき資格を得むが爲めに、文學者たるべき修養の一として、かくの如き經驗を、わざ〳〵求めた

ものではない。運命が彼等を導いたのである。そして、運命の彼等を暗黑に導くや、それが、偶然のことのやうに思はれず、彼等天才の天才なるが爲めの故に、かくの如く意地惡くいぢめるものゝやうに見えるのである。

彼天才は實に不幸なる人である。去かし彼等が大詩人大文學者となる爲めには、あれ丈けの苦い經驗をもしなければならなかつたので、さう考へれば寧ろ不幸の如くにして不幸でない。文學者たらむとするものが、故らに求めて達すること能はざるものを、自らにして達するは、實に彼等の祝福である。現實に於て失へるものを、藝術に於て償はれたのである。

自分は前きに、文學者たるべき人の先天的素質を述べた時、好奇心に富むだ人は、必要もなきに、種々なる事柄に手を出したり、首を突込むだりして、生活上隨分危險でもあり有害でもあるけれど、文藝の上より見れば、此

物あるが爲めに、自ら求めて新しき境遇を作り、新しき人生の興味を經驗するものだと云つた。そして、天才はとりわけ好奇心に富むで居るからして、從つて自ら新しい經驗を獲たいと云ふ衝動が強く、また從つて人生を見、人生に觸れる機會を作るに便なるものであると云つた。

さうすると、人は故らに自ら苦い經驗をすると云ふことも出來るではないか、現に天才などは盛にそれをやつてるではないかと、云ふ人があるかも知らぬ。が、併しながら、好奇心の衝動によつて新經驗を渴望するのと、文學者たるべき修養の一端なりと思惟して、人生の暗黑面を經驗せむとするのとは、だいぶ其趣きを異にして居る。好奇心の衝動は、抵抗すべからざる本能である。かくの如き本能あるが爲めに、或は禍せられ、或は禍せらるるは、所詮人間の宿命である。自ら求むると云ふと雖、實は自ら求めざるを得ざるのである。かの文學者たるべき修養の一手段として、所謂人生の經驗を求むるやうな、そんなわざとらしい、不自然な、また滑稽なものでは無いのである。

要するに人生の經驗なるものは、專ら各人の運命に倚賴するものなので、ことさらに之を求めむとしても駄目なものである。從つて人生の經驗なるものは、文學者たるに必要の條件ではあるが、嚴密に修養とは云はれないものである。

それならば、人生の經驗なるものに就いては、吾人唯だ運を天に任すより外はないか、また運を天に任すより外はないとして、一切頓着しないで置いてよいものかと云ふに、さうでない、大にさうでない。

吾人は運命によつて決定せられたる經驗の範圍内に於て、其經驗されたる

事物を最も巧みに利用することを心掛けねばならぬ。同じ廣さと、同じ深さとの經驗を、最も巧みに利用して、人生の嚴肅なる意義を表現する上の手段としなければならぬ。しかして之を爲すもの實に觀察である。

觀察は、事物を解剖し、分析し、之を他の事物と比較し、其關係を明にしまた事物其物の意義並びに價値を判定するの作用である。

而して經驗と觀察とは精密に云へば別物で、いかに人生に對する廣く且つ深い經驗のある人でも、此觀察と云ふものを缺けば、文學者詩人となることが出來ぬ。詩人文學者の場合にあつては、一度び經驗し獲たものを、更に再び觀察する、是が必要なる順序なのである。

一般に痛切なる經驗を積みたる人は、自ら犀利なる觀察の眼を以て居るものではあるが、しかし、常にさうとばかりは限つて居ない。世間には隨分

いろ〳〵の境遇に漂ひ、いろ〳〵の閲歴を作つて來た人でありながら、案外觀察したことも少く、また觀察の力も鈍いものが少からずある。

そこで、觀察と云ふ作用が、人爲の工夫によつて助長せらるゝものならば換言すれば、觀察力なるものが、もし之に修養を加へて、更に之を鋭利ならしめ、更に之を明確ならしむることを得るものならば、則ち人は文學者たるべき修養の一として、觀察作用の助長と云ふことを心掛けねばならぬのである。

觀察力は鍛錬を加ふることによつて、いよ〳〵明確になり、鋭利になる、是はたしかなる事實でむる。恐らくは讀者諸君も首肯されることと思ふ。

乃ち前きにかの人生の經驗其物に於て、運命の束縛を脱すること能はざりし吾人は、今この經驗されたる事物の觀察に於て、之を助長し、發達せしむ

るの自由を許された。吾人は此觀察に於て、自らの經驗したる事物を出來得る限り巧みに利用し、以て經驗其物の上の制限から來る不利益の大部分を除去することが出來るのである。

偖てそれならば、その觀察力を助長し、發達せしむる方法は如何。

其方法の第一は、更めて云ふまでもなく練習である。多次の練習である。即ち、何か一つのことを經驗する毎に、必ず其經驗したる事物を分析し、解剖し、他の事物と比較し、相互の關係を明にし、其物の意義や價値を判定することを怠らないのだ。機會ある度毎に、常に之を繰りかへして、練習するのである。

觀察を鋭利にし、明確にせむが爲めに必要なる第二の注意は、時々經驗の渦中より一歩を退き、冷靜なる態度を以て、物を見ると云ふ練習である。

人は如何に波瀾の多い生活を送つても、如何に趣味のある境涯に居つても、折々この冷靜なる態度をとつて、之を考察すると云ふことをしなければ、丁度かの目をつぶつたまゝで水の中を潜ぐるやうなもの、いくら潜つても潜つても物を見ず、美しい藻の花をも、魚介をも取らず、眞珠の貝をも拾はず、龍宮の前をも素通りして歸つて來るより外はない。

玄かしまた、始終冷靜の態度を以て物に對し、理智の眼を開いて物を見て居る人は、意味ある人生の經驗に入るべき大半の機會を失つて了ふので、豊富深刻なる經驗をなし得る人は、まづどうしても、熱中狂奔の出來る人でなければならぬ。そして熱中狂奔のあいま〳〵に、覺醒の眼を開くと云ふことによつて、所謂觀察なるものが爲し得らるゝのである。それ故に觀察を鋭利にし明確にせむが爲めに必要なる第二の注意として、時々經驗の渦中より一

歩を退き、冷靜なる態度を以て物を見ると云ふ練習を擧げたのである。

此練習を重ねて行けば、自分と云ふものを他の人と同じやうに取扱つて、所謂客觀することが、だん〳〵とうまくなり、後には熱中狂奔の次ぎの刹那に於て直ちにそれを客觀することが出來るやうになる。換言すれば經驗しながら、觀察して行くやうになる。かうなつて、始めて一切の經驗が無駄にならないので、其人の觀察力は遺憾なく發展されたと云つても差支はないのである。

觀察力を養ふ上に必要なる注意はまだ外にもいろ〳〵あることはあるが、右の二ヶ條を最も大切なるものとして特に掲げて置く。

以上述べたる如く、經驗と觀察とは元來同一物ではなく、また嚴密に云へば經驗は修養の範圍外にあるものではあるが、經驗がなければ、觀察も無意

味になり、經驗丈けあつても觀察がなければ役に立たぬと云ふ、密接なる關係もあり、又世間往々、此二つの作用を合せて、經驗と呼むで居ると云ふ事情もあり、かた〳〵「經驗と觀察」なる題目をかゝげて、文學者たるべき修養の一面を說いたのである。

第十章　創作の稽古

創作の稽古は其早きを患へず――模倣――獨創――個人性――模倣すべきもの――模倣の方法――刺激と暗示――シエクスピア――ダンヌンチオ――小栗風葉氏と與謝野寛氏――正直にかくと云ふ事――事實らしく書くと云ふこと――描寫の練習と寫生――創作の材料と寫生――推敲――幸田露伴氏と故尾崎紅葉氏――簡潔と冗漫――まづその筆なのばすべし――絢爛と平淡――試作物を活字にする の利害

文學者たるべき先天的の素質があり、後天的の要素として、讀書あり、經驗と觀察とあり、而して最後に無かるべからざるものは、創作の實習稽古即ち試作と云ふことである。

試作は非常に大切なものである。如何に古今東西の名著傑作を讀むで、見聞を博くし、趣味好尚を養ふにしたところで、また如何に人生に對する深刻痛切なる經驗あり觀察あるにしたところで、たゞそれ丈けで直ちに世を驚かすやうな作品の出來るものではない。立派なものを作り上げる前には、其準備として、どうしても稽古がいる。筆ならしと云ふものが必要なのである。で之を文學者たるべき者に必要なる第三の修養として數へる。

但し、第三の修養とは云ふものゝ、是はもとより、讀書や觀察の方の修養が遺憾なくなし遂げられてから、後始めてとりかゝると云ふわけのものではないので、一方に讀書したり、觀察したりすると同時に、また一方に於て、この筆ならしをやるのである。で、もし、この實際に文章を作つて見ると云ふ稽古の方に力を注ぐが爲めに、他の修養をおろそかにすると云ふ心配さへ

ない限りは、此稽古はいくら早くからはじめてもいゝ。寧ろあまり遲くならぬ中に始めた方が得策であるかも知れぬ。と云ふのは、實際に自分が筆を取つて何か詩でも小說でも書いて見ようとすると、なか〳〵思ふやうにはいけぬ。その思ふやうに書けないのは、まだ本の讀みかたが足りないのだ、或は經驗や觀察に不足があるのだ、とはじめて思ひ當る。そして愈々それ等の修養の必要なることを感ずるからである。

藝術は自然の模倣なりと云ふ議論は、古くから行はれて居るが、其議論の當否は暫く措き、人が文章の稽古をする場合に、まづ免れがたきものは模倣である。

藝術の本領から云へば、作家自身の獨創(オリヂナリティ)を出し、個人性を發揮するところに中心の生命を存することは勿論である、それは寧ろ修養の出來上つた曉

に於てはじめて期すべきことで、初學入門の人に向つて要求すべき事柄でない。初學入門の人は、どうしても模倣よりして進まざるを得ぬ。

初學の人に向つて獨創を出せよとか、個人性を發揮せよとか云ふのは、つまり出來ないことをせよと云ふに同じく、極めて無理な注文でもあるし、また、初學の人自らが、模倣を斥けるところに自分の本領があると云つて居るのは、偶ま以て彼の不勉强を辯護するの口實となる位のもので、實際には寧ろ避くべき方針と云はなければならぬ。

で、模倣は所詮斥け難きものとするならば、如何なる方法に於て模倣したらばよからうか。

自分はまづ、其方法の一として、成るべく立派なものを選むで模倣することを數へる。作家に就いて云へば、第一流の詩人文學者、殊に其人の價値が

充分に決定された歴史上の天才を模倣しなければならぬ。蓋し現存の作家だと云ふと、非常に名聲の高い人が案外に平凡な人であつて、模倣して得るところ寧ろ少く、たゞ妙な癖が附いたりなんかして、面白くないばかりでなく第一また、いかに初學の人とは云へ、同時代の作家を眞似ると云ふのは、多少其人の自尊心を傷くるやうなもので、それも過去に立派な手本のない場合はともかく、さうでない限りは、なるべく歴史上の天才を模倣する方が得策であらうと考へるのである。

模倣すべき作品に就いて云へば、また無論不朽の傑作と云はれるやうなものを模倣することだ。盛名のある人でも隨分書き損ひはあるものであるから同じ天才の述作でも、とりわけ文壇に定評あるものを選ぶことが肝要だ。

それから今一つの注意としては、局部の技巧よりも、全体の技巧、一部分

の内容よりも全部の内容といふやうに成るべく、作物、作家の全體を模倣するやうに心掛けることが大切である。さう云ふ方針で模倣すれば、同じ模倣でも單に形式的なものでなくなり、それがだん〳〵と精神的のものとなるにつれて、模倣はやがて感化となり、影響となつて、つひには單に他の作家より刺激暗示を受けると云ふ丈けになつて了ふ。

他の作家から刺激や暗示を受けると云ふことは、堂々たる大家に於てもあることで、是は唯の模倣とちがひ、作家自身の獨創を傷けるものでもなく個人性を滅却するものでもない。寧ろこの刺激や暗示を鋭敏に感得する人は、大詩人大文豪に多いもので、彼等は此方面の卓越したる作用によつて、綜合し得られる丈けは、過去のあらゆる作家作物の精神を綜合し來つて材料とし、また利用し得られる限りは、同時代文士のあらゆる作風技巧を利用する。

沙翁の如き人もまた實に是れで、最近文學史家の研究によれば、沙翁以前既に幾人と數知れぬ小沙翁があつたので、それ等の小沙翁は皆一大沙翁の爲めに作物の材料も、技巧も吸收せられてしまひ、其名までも彼の爲めに埋沒されて去まつたのである。しかし沙翁は決して模倣者ではない、少くとも謂ふところの模倣者ではない、彼はたゞ其鋭敏なる感受性により、過去並びに同時代の小文士から刺激を受け、暗示を獲て、綜合し得られる丈け綜合し、利用し得られる丈け利用したのである。乃ち彼には立派な獨創がある、個人性がある。

現代の作家に於て例を求むれば、伊太利の小說家ダンヌンチオの如き、まづ第一に推すべき人である。ダンヌンチオは人も知る如く、近代自然主義の驍將で、今は既に故人となつた露西亞の作家ツルゲネフと相並むで、小說史上

の二大明星とも云ふべきものであるが、此人なども隨分他の作家から刺激を受け、暗示を獲る方で、我々の如き讀書範圍の狹いものにでも、是は佛蘭西のゾラから來て居る、是は露西亞のトルストイの用ふる技巧だ、また是は丁抹のマアテルリンクの考だと思はれるやうなところが幾個所となく見出されるのが、我々はそれを所謂模倣と見て、其價値を卑めることはなし得ない。蓋し、それは見識のない人眞似ではなくて、自分の立場はそのまゝに、うまく人のものを利用して去まつたのである。總合して去まつたのである。

勿論ダンヌンチオとても今日の如き立派な作品をうるまでには、よほど模倣的作品もあつたものと見えて、十年も前には、あまり評判がよくなかつたらしく、殊に其鄕國たる伊太利に於ては輕視されて居たやうである。しかし今日のダンヌンチオは決して模倣を以て難せらるべき人でない。彼には立派

な特性がある。

我が日本今日の作家では、小說界に於ける小栗風葉氏と、韻文界に於ける與謝野寛氏とを擧げる。

與謝野氏が詩壇に顯はれたのは、割合に新しいことなので、島崎藤村、土井晚翠諸氏の時代はもう去りかゝつて居た。だから此人達の詩風が與謝野氏に影響したことは殆んど無いと云つてよいけれど、薄田泣菫、蒲原有明、上田敏諸氏の述作が、直接間接少からざる刺激と暗示とを與へたのは爭ふべからざる事實である。之と反對に、上田氏や蒲原氏や薄田氏やが、與謝野氏から受けられた暗示並びに刺激は、極めて少いものであらうと思ふ。

去かし、與謝野氏は模倣の詩人ではない。忌憚なく之を云ふ、氏は甘んじて敏氏や、有明氏や、泣菫氏の後塵を拜すべく、あまりに天分の多い人であ

る。氏は主として是等諸家の述作に潛める生命を吸收して、だん〳〵と大きくなつた人である、また益〻大きくなり行くべき人である。

小栗風葉氏は、前に擧げたダンヌンチオと餘程よく似た傾向を有つて居て、其淡白よりも濃厚を好むところ、瀟洒よりも豐麗に於てまさるところ、又總じて奔放熱烈なる南歐の趣味を喜ぶところなど、どうしても日本のダンヌンチオと云ひたい人であるが、此人がまた非常に鋭敏なる感受性を有つて居る。そして其鋭敏なる感受性あるが爲めに、他の作家作品から——尤も是は主として外國の作家作品から——暗示を與へられ、刺激を受けることは實に非常なものである。

固より外國の文學と我が日本の文學とは、其發達の程度に非常の徑庭があることだから、日本の作家にして外國の作家作品から暗示、刺激を受ける塲

合には、餘程注意しなければ、つひ單なる模倣に了り易いものなので、現に小栗氏の從來の小説には、殆んど模倣的作品とも云ふべきものがないではないが、さう云ふ風も是からはだん〳〵と少くなつて行かうし（ダンヌンチオの如く）、また已に模倣の域を超えた傑作も少くはないのである。で、吾人は、氏が從來やゝもすれば、不消化なる踏襲模倣に墮ちた過を責むるよりも、寧ろその我が文壇にあつては、異彩とも見るべき、鋭敏なる感受性をまづ認めたいと思ふのである。

少し話がわき道へ這入つたが、之を要するに、模倣と云ふことは強ち斥くべからざるもので、其方法さへ宜しきを得れば、寧ろ利益のあることで、また一方に於て全體の修養が完全してくるにつれ、單に感化影響を受ける丈けのものとなり、刺激暗示を受ける丈けのものとなつて、模倣もつひに模倣でなくなるものと、かう云ふのである。

次ぎに、正直に書くと云ふことが文學上非常に大切なるものではあるけれど、是がまたなか〳〵むづかしい。餘程の大家と云はれる人ですら、隨分不正直なことを書いて居る。ましてや文學に入門したばかりの人に正直を要求するのは、少し無理な要求であるかも知れぬと思ふ。

正直に書くと云ふのは、見たまゝ聞いたまゝを、飾らず蔽はず描寫するのである。感じたこと考へたことをそのまゝに、包まず藏さず告白するのである。之が容易なやうで實に困難である。

まだ小學校に通つて居る少年が、一瓢を携へ花見に出掛けると云ふやうなうそは、大人ならば流石にやらないけれど、しかし、さうまで甚しくないうそ、殊に誇張や矯飾は隨分とやるものだ。人が死むだ時、氣の毒と思ひ、可

哀相だとは感じたかも知らないが、天に慟し、地に哭するのは、文章の上だけの場合が多く、徹宵眠をなさずと書いてあつても、實は二三時頃からぐら〳〵寢込むで了ふなぞも少くないことだ。

で、かう云ふ誇張や、矯飾をやるのは、在來の、型と云ふものに囚へられて居るからでもあらうし、また觀察が正しきを得ないからでもあらうし、その他種々なる原因のあることでもあらうが、就中最も重要なる原因の一は、此誇張、矯飾によつて、より大なる効果が收められると誤解すること是である。

かう云ふ誤解は屢々ある誤解で、また甚だ危險なる誤解である。蓋し、人が、白髮三千丈と云ふときは、それが誇大であるのを知らないのでは勿論ない。それは十分によく知つては居るが、さう云ふことによつて、如何に白髮

の長く垂れたるかを想見せしめむが爲めである。寢食を忘れてと云ふとき、それが事實でないことは、云ふ人から承知の上である。事實は一晩もねなかつたことはなく、一食も飲いたことはないのだけれど、大袈裟にさう云つたらば、讀む人、聞く人に強い印象を與へるにちがひないと思ふのだ。ところが、之は誤解である。矯飾は決して人を動かすべき道ではない。誇大は到底人をうなづかしむべきものでない。さう云ふ不正直なる手段と云ふものはいかに立派な目的の爲めに用ひられたにもせよ。到底効果を奏すべきものではない。よしまた偶然の成功を收め得たところで、それは所詮藝術の本義に協はざるもの、嚴に排斥すべきものなのである。

もつとも、事實ありのまゝをかくと云つたところで、文學は寫眞とも違ひ、裁判所の口供とも違ふので、嚴密に實際生活の記錄でなければならぬと云ふ

わけはない。單に實際の記錄を作る丈けで、文學になるならば、詩人に空想などはいらない話で、創作上の結構とか、脚色とか云ふやうな言葉は皆無意味になつて了ふ。

詩人に空想が入用なる限り、創作上結構や脚色の大切なる限り、誇長してはいけない、矯飾してはいけないと云ふもの、畢竟、嚴密に事實の記錄を作れよと云ふのではなく、むしろ、事實らしいことを書け、事實としてもありさうなことを書け、更に換言すれば、尤らしく思はれるやうに書けと、かう云ふことに歸着せねばならぬと思ふ。

尤らしく書く、之が大切である。外界の事物を描寫して尤らしく描寫し、心に思ふところを述べても、尤らしく述べる。つまり自然に從ふのである。不自然を避けて自然に就くのである。

で、この描寫の上に、また感想を叙ぶる上に、不自然をさけて自然に就くと云ふことは、前にも述べた通り、なか〳〵さう容易なことではないけれど、玄かし、向上心のある人は試作の間常に此心掛けを以て進まねばならぬ。

偖て此不自然を避けて自然に就くと云ふ方針から見て、外界の事物を描くのと、自家心内の懷抱を披瀝するのと、どちらが、容易かと云ふに、それは外界の事物を描く方が樂なので、初學の人は、まづ外界の事物を描く方からして自然に從ふの修養を積むが順序である。而して是には所謂寫生と云ふものが大に重寶なのである。

寫生は、創作の際、小道具として材料にもなるもので、強ち、正直にかく自然にかくと云ふ練習の爲めにのみやるものではないが、玄かし初學の人は主として、之を修養の一面と見做し、暇ある毎に筆をとつて周圍の事物を寫

生して見るがよい。特に自分一己の好惡の念や、愛憎の情や、凡べて所謂主觀を交へないで、寫生して見るがよい。初學の間主觀を交へれば、どうしても誇張になり、矯飾になり、去かして竟に自然を遠かるやうになり易いからである。

自分は前に、「經驗と觀察」を述ぶるに際し、人が寫生帳を懷にして出掛けるやうなところに、深刻なる人生の意義が轉がつて居てたまるものではないと云つて、寫生の價値をひどく下げた。あれは寫生と云ふものを無暗と有難がり、殆んど万能の効驗あるものゝやうに思つて居る文壇一部の風潮に慊らないから憤慨したので、もと〳〵寫生なるものゝ價値を全然無視して居るものでは決してない。

寫生は以て人生の深刻痛切なる經驗と觀察とに代へることは出來ないが、

去かし、已に深刻痛切なる經驗をなし、觀察をもなし得る人にとつては、創作一部の材料を蒐集する手段として誠に重寶なものである。然らざるもまた、今この描寫の自然を得るの練習として、文學の入門者が之を利用するならば、得るところ甚だ少くないのである。

創作の稽古をなすに際し、注意すべき第二の事柄としては、推敲の苦心を擧げる。

昔し支那に何とか云ふ詩人があつた。其詩人が詩を作つて、推扉云々の句に至り、推の字を改めて敲とした。即ち扉を推すを改めて、扉を敲くとしたのである。が改めて見てまた再び推に復し、更に再び敲に復した。かくしていくたびとなく推とし、敲として其月を送り、其年を越えたと云ふ、是が世に推敲なる文字の出來た曰く因緣であるさうな。

昔の人はまたよく、一吟双涙流ると云つた。文章に就いては誰も彼もなか〳〵苦心をしたものと見える。また苦心しないで上手になれるわけのものではない。

ところが、世間には往々、文字の推敲と云ふことを恥づべきものゝやうに思つて居る人もあるもので、さう云ふ人は無暗矢鱈と、一氣呵成とか、天衣無縫とか云ふやうなことばかり口にし、兎角試作の勉強をおろそかにする傾がある。誠に不心得千萬な話である。

成るほど多くの作家の中には一氣呵成で書き上げて仕舞ふ人もないことはない、が、これと同時に、推敲したが上にも推敲し、練つたが上にも練つてはじめて筆を擱く人もある。是は作家それ〴〵の流儀で、あながち何れを高しとし、いづれを低しともするわけに行かぬ。我が文壇の作家に就いて云

つて見ても、幸田露伴氏などは（二日物語丈けは別として）まづ一氣に筆を走らして了ふ方であつたと云ふし、故人尾崎紅葉氏の如きは、大に練つて〳〵身もやせるまでに練つたのだと云ふ。而かも此相違よりして、直ちに二家の長短を云ふものあらば、早計も甚しと云ふべしだ。かの露西亞の大小説家たるツルゲネフなども一つの文章を七遍も八遍もかき代へたことがあると云ふ。しかも是を以ての故にツルゲネフの大小説家たることを否むわけには行かぬ。要するに一氣呵成など丶云ふことは、そんなにエライことではないのである。

加之、如何に一氣呵成にやつてのける人でも、兎に角、最初は細心の稽古をしたに違ひないので、はじめから天馬空を行くやうに筆の飛ぶべきものではない。だから、何れにせよ、初心の人が推敲を怠つてよいと云ふ理屈は見

出せないのである。

また一面よりして之を見るに、推敲と云へば、いかにもわざとらしいもので、また從つて不自然なるところあるを免れないものゝやうに思ふ人もあるかは知らないが、ほんとうの苦心と云ふものは、つまりさう云ふ不自然なところ、したがつて、さう云ふわざとらしい所がないやうにと骨を折るのである。即ち謂ふところの斧鑿のあとを殘さないやうに、天衣無縫と云つたやうにしたいが爲めの推敲なのである。

第三には冗漫と簡潔と云ふことに就いて、一言注意をして置きませう。

文章は簡潔にかゝねばならぬ、だら〳〵と牛の小便見たやうに長いばかりが能ではない。成る丈け、無駄のないやうに、引緊めて書くのが文章の要訣であると、之は世間でよく聞く言葉であるが、なるほど簡潔は大切だ、大に

大切である。大に大切ではあるが、是もまた始めから簡潔を期しても、なか〳〵うまくは行かぬ。一體に文章が上手になれば、自ら簡潔にもなるものであるから、たゞ徒らに簡潔々々とあせるには及ばない。加之、文章の初歩からして、あまり此簡潔と云ふことを喧しく云へば、却つて筆端の自由を窘束されて、妙にいぢけて仕舞ふやうになり、其結果があまり面白くない。寧ろ最初の中は何でもかんでも、かまはずに書いて行く、即ち筆をのばすと云ふことが必要である。

簡潔は必ずしも短いものとのみは限らず、冗漫も、強ち長いことのみは限らないけれど、長いものを書けば、概して冗漫になり易い、と同時に所謂筆を延ばすのも長いものを書く場合である。短いものを書いて居ると、つひどうしても文字の詮義がやかましくなり、簡潔々々と云ふやうになる。

それ故に、一般に文章をはじめて稽古する人達は、むしろ長いものから書いて見る方が宜しい。散文も殊に小説などやらうと云ふ人はあまり短いものばかり稽古するのは考物である。殊に所謂小品文や短文などばかりやつて居るのは危險である。むしろ最初は思切つて長い物をかき、思ふ存分に筆を延ばして見る方が面白い。和歌や俳句のやうなものは、形式に一定の制限があつて、長くかくと云ふわけには行かないが、しかし、是でもかなり澤山の歌をよみ、句を作る方が、後々の爲めによいと思ふ。

次きには絢爛と平淡と云ふことに就いての注意を申上げませう。

美人の美は、紅白粉澤山の厚化粧よりも、うッすらと一刷毛はいたやうなところに於て、最もよく見られると同じやうに、文章のしみ〴〵とした味は、所謂絢爛よりもむしろ平淡の中にあるものであらう。こつてりしたのよ

りも、あつさりしたのにあるものであらう。

併し此平淡と云ふものは、最初からして直ぐに獲られるものではないので是は一旦絢爛に入り、絢爛を極めて、それから後にさうなつたのである、絢爛を通らずに平淡に來ることは出來ない。よし出來たにしたところで、絢爛を通つて來ないやうな平淡は、ほんとうの平淡でない、價値のない平淡である。で、どうしても文章のやり始めは、絢爛を心掛けなければならぬ。氣障でもよい、嫌味でもよい、垢抜けがして居ないと云はれてもよい、そんなことには頓着なく、盛むに極彩色を用ひ、油ッ濃い筆を使つて、コッテリしたものを書くがよい。支那などでも四六駢儷などゝ云ふ所謂技巧の極を盡した文章があつて、然る後に韓退之一派の平淡なる古文も起つたのだ。之は一個人の傳記に於ても同樣の經過をとるもので、ツルゲネフなどゝ云ふ人がやは

り始めは厚化粧を好むだ方で、狩獵日記など評判の作ではあるけれど、初期の作品である丈けに、むしろ絢爛に過ぎるかと思はれるやうなところが隨分とある。さかるにそれが晩年になつては非常に平々淡々たる筆致となつてどこに技巧があるのかとさへ思はれるやうになつて了つた。乃ち絢爛の後に平淡が來たのである。

文學を韻文とか、小說とか、脚本とかに、細かく分けて、それ〴〵の作法や、その伴ふ注意などを申上げるつもりならば、まだ申上げることも澤山にあるけれど、本書はたゞ文學を文學全體として、全體に通ずるお話をするのが目的であるからして、それはまた他日の機會に讓りませう。が、序でにもう一つ丈け注意をして置きたいことがある。それは外でもない試作物を活字にするの利害と云ふことである。

抑も文學者の修養として、讀書なり、觀察なり、またこの試作なりは、作家が文壇に立つて居る限り、いつまでも怠つてはならないものなので、さう云ふ見方からすれば、作品は凡べて皆試作物とも云へるのだが、こゝに謂ふところの試作物は、まづ一通りの修養が出來上るまでの物を云ふのだ。世間で兎に角く、うまいとかまづいとか云つてくれるやうになる、その前の製作物を云ふのだ。

偖てさう云ふ試作物を活字にする、とくに所謂投書雜誌に投書すると云ふこと、私自身の經驗から云つて見ても、はじめて自分の書いた文章が、活字になつたのを見たときの嬉しさは、何ともかとも云へないほど嬉しいものであつた。是はどう云ふ人でも同じことであらうと思ふ。

ところで、この試作の文章を印刷させると云ふこと、殊に早くから雜誌に

投書したりなんかすると云ふことには、慥にある弊害が伴ふ。雜誌の記者から少し煽てられでもすると、直ぐにもう一廉の文學者にでもなつたやうな氣で、慢心を生ずる。從つて學校の生徒ならば學課をなまけ、成蹟が惡くなり、落第する、退學する、ぶら〳〵と放浪して居る中には、墮落しないものでもない、そして其結果は一生の目的をあやまつて了ふ。とまあ、かうまで甚しい弊害を來さないまでも、とにかく、學校の正課を嫌ひ學校の成蹟が惡くなる位なことは、十人の中七八人までは免れない。之は有害の一面である。

翻つてまた他の一面より之を見れば、投書雜誌の選者からでもよい、自分の作つたものを褒めて貰つたとする。さなきだに興味を有つて居る文學に、一層の興味を有つやうになる。また大に自信をまして來る。その結果はいよ〳〵ます〳〵勉强し奮發するやうになる。即ち有益なる反面である。

で、かくの如く、早くから、自分の文章を活字にして見ると云ふことには、功過並び存ずる次第ではあるが、をかし、もし諸君にして此有害なる一面を充分に警戒し、をつかりしてやられるならば、まづ〳〵差支のないことであらうと思ふ。殊に其弊害と云ふのは、文學其物の上から見ての弊害ではなくて、文學以外の生活に於て失敗を招くと云ふに過ぎないのであるから、またどのみち文學をやる位の人ならば、現實世界に於ける成敗なんか眼中にない筈でもあるからして、さう云ふ見地よりすれば、强ち恐るゝに足りないことでもあらう。文學には限らず、凡べての事業と云ふものは、多くの犧牲者を得て始めて成るものだ。一人の天才を出す爲めに、外くの凡才を犧牲にするのは止むを得ない。現實の成功を斷念して、專心文學に從ひ、さて文學も物にならない人があるのは勿論であらう。をかし、唯だ一人の大詩人大文學で

も出たならば、それで以て滿足しなければならぬ。堀の埋草になつた凡人連も、また甘むじて瞑目するより外はない。

吾人はむしろ、雜誌に投書するなぞを、惡いと云はぬ。とくに諸君にして大に自信があるならば、盛にやり給へとおすゝめする。唯だ、さう云ふことにのみ浮身をやつして、肝心の讀書や、研究や、觀察等の大切なる修養をおろそかにされないやうにと希望する。文學者たるべき修養さへ怠ることがないならば、啻にそれが惡いことでないのみならず、また實に望ましきことなのである。

世間には、また妙に細心な、むしろ憶病な性質から、無暗と大事をとつてばかり居る人があるものだ。さう云ふ人は立派な文才がありながら書いて見ぬ、書いても人には示さないで置く、殊にそれを活字にするやうなことを遠

慮する。で、その爲めに折角の素質あり、他の修養もやりながら、試作をやらないで居るからして、所謂目が肥え、氣位ばかり、だん〳〵高くなつて、いよ〳〵かきにくゝなる。また書いたものをも世に公けにしないで置くと、一種の僻むだやうな考になつて、はじめは自分より文才がない癖に雜誌に投書などして居る儕輩を睥睨する位だが、後には漸く、現在の文壇其物を白眼に見るやうになり、その結果は新刊物などは讀まず、讀むでも讀まぬ風をし、過去の文學に遁れ、外國の文學に走つて、最後には全く文學と緣がなくなつて了ふ、かう云ふ人はよくあるものだ。そしてかうなつたもと〳〵はと云へば、自分の憶病からして試作をやらないからだ、またその試作を活字にすることなどを妙にはにかむだりして居たからである。

かう云ふ點から考へて見れば、試作はなるべく夙くからはじめると云ふこ

と、また其試作をいゝ加減な頃には公けにすると云ふことが、いよ〳〵必要となつて來るのである。

第十一章　批評と批評家

批評家の任務——批評と創作との輕重——批評は創作の奴隸にあらず——批評の両面——鑑賞と說明——批評家たるべき資格——作家肌と學者肌——學者たるべき素質と修養

汎く文學者と云ふものゝ中には、創作家と批評家との二通りがある。が、一般には、文學者と云へば主として創作者を意味しても居るし、また讀者諸君の大部分は、恐らく其興味を創作の上に有して居らるゝことゝ思はれる事情もあるししたので、本書は以上專ら創作の方面に重きを置き、創作家たるべき先天的の素質や、後天の修養を說いて、つひに批評家のことには及ばなかつたのである。吾人は本來決して批評の意義を無視して居るものでもなく

また輕視して居るものでもない。

批評家は一面創作家を監督し、一面讀書界を誘導する大切の役目である。

世間往々、創作があつてはじめて批評はあるもの、即ち批評は創作に比して、一段價値の低しものゝやうに思ふ人もあるやうだが、あれは甚しき心得違である。批評は必ずしも創作の後に出るものではない。二者相須つて其用をなすと云ふのならば、創作あつてはじめて批評ありとも云べないことはなからうが反對にまた、批評あつてはじめて創作ありとも云へるので、一概に其前後を云ふことは出來ないのだ。事實として、批評の創作に先だつた場合はいくらもある、即ち創作家の言說に聽いて、作家の筆を執つた例はいくらでもあるのである。

よしまた假りに一歩を讓つて、批評が創作の後に出るものとしたところで

それがどうして、批評の創作よりもつまらぬと云ふ理由にならうぞ。人の文を草するや、筆あり、紙あつて然る後、文ありではないか。しかも筆紙の作文に先つの故を以て、作文を筆紙よりも卑しとする人のあつた話はない。總じて出現の前後は、物の輕重を判定するの標準とはならないのである。

それに批評と云ふものは、元來文學上の方便としてのみ存在するものでない。換言すれば、創作品と云ふものから離れて、批評は批評として、獨立の價値を有するものであると吾等は信ずる。去かし、かう云ふ問題を決定するのには、だいぶ專門學上の議論を必要とすることであるからして、精しく云はぬ。

兎もあれ、批評と創作とは、どちらがさきに出たから、價値が高いの、どちらが後に出たから價値が少いのと云ふのは、全然謂れなき議論と云はざる

を得ぬ。創作は固より無くてならぬものである、批評もまたなくてならぬものである。是れ以上に立入つて價値の比較をするなぞは、無用の詮義と云ふものである。

偖て此批評なるもの丶性質を吟味して見るのに、それには重要なる二つの方面がある。一つは趣味の判斷によつて、此傾向はい丶傾向だ、此作品はよくない作品だと決定する。それ〴〵作品や傾向に應じて、それ〴〵相當の價値を附する、即ち所謂鑑賞の作用をなすものである。今一つは冷靜なる理論を以て、其判斷の正當なる所以を明にする、即ち説明の作用をなすものである。

批評家はまたそれになる丈けの資格がなくてはなれぬ。然らばその資格とはそも〳〵如何なるものぞ。右の兩面に適應する素質と修養と、即ちそれで

ある。

鑑賞の作用と、創作の作用とは、勿論同一ではないけれど、鑑賞家として立派な判斷の出來る人は、其趣味決して創作家より下にあつてはならぬ。創作家と劣らない丈けの趣味性がないならば、立派な作品の立派なところをも見落し、まづい作品のまづいところをも氣附かずに了ふ。で、どうしても批評家には創作に劣らない丈けの趣味性がなければならぬ、創作家からして門外漢視されるやうなことでは駄目である。

ところで、創作家と同じやうな趣味性、さう云ふ趣味性を有つ爲めには、また創作家と同じやうな素質もいり、修養もいる。よし同じ程度でないまでも、同じ種類の素質がいり、修養がいる。よし實際には筆を執つて小説を書き、詩を作らないで居るにもせよ、書かうとすれば書けもし、作らうとすれ

ば作れる位の人でなければ駄目なのである。

それから、批評の他の一面たる説明はどうかと云ふに、之はむしろ創作とは趣きを殊にしたる作用であつて、專ら人の智力に倚賴し、理論に須つ、即ち學問の範圍に屬する、少くとも學問を直接に應用したるものである。

で、批評家は、正確なる趣味の判斷を下して、諸作家の作品を評價すると同時に、一方に於ては、其判斷のよつて來るところを說き、其謬らざる所以を明にすると云ふ、大切なる任務を有するが故に、其批評家たるべき資格として一面、また文學者として立てる丈けの人でなければならぬ、即ち創作をやらうと思へば、創作もやれ、學問をやらうと思へば、學問もやれると云ふ風の人でなければならぬのである。

去かし、是はなか〳〵むづかしい註文なので、かくの如く完全なる資格を

具へた人はまづ多くないと云つてよい。從つて文壇の實際には、單に創作家たるべき資格丈けしかない人をも批評家として推し戴き、其人の趣味性からばかり割出した判斷、即ち鑑賞の告白を以て滿足せねばならぬ場合もある。殊に其人の趣味性が大に發達して居るならば、判斷はまづ間違ないのであるからして、完全なる批評家を得られない時代などには、まづ第一にかう云ふ人に依賴せざるを得ないのである。

また或る場合には、一向創作家肌でない、純然たる學者の議論を以て、批評に代へ、さう云ふ人をも批評家として取扱はなければならぬこともある。殊にかう云ふ人は、自分の覺束ない趣味性にまかせて、判斷を下したりなんかするから、飛むでもない間違を惹起すものだけれど、鑑賞の慥な人の判斷を基礎として、其上に自分の學問を適用して議論をするやうにすれば、大に作

家を益し、讀書界を利するものである。

更にまた他の場合には、鑑賞の眼も作家よりは鈍く、學問もまた到底學者として立つには足らないやうな人でも、兎に角、作家よりは學問があり、純粹の學者に比しては趣味もあると云ふならば、不完全ながらも兎に角批評家の任務を盡さないことはない。

つら〳〵今の我が文壇を見渡すに、自らも批評家を以て任じ、世間からも批評家を以て許されて居る人の大半は、殘念ながら、右に掲げた三通りの批評家の中の何れかである。自分は固より、時勢の必要上誠に止むを得ないものとして、這の種の批評家にも存在の理由あることを認めないではないが、去かし、一方の創作界には中々立派な人が既に出もしたし、またます〳〵出て來ようとするの形勢あるに比し、評壇ひとり寂寞として、未だ一人の批評家ら

しい批評家を得ないで居ることは非常に遺憾に思ふのである。

再び之を繰返へして云ふ、完全なる批評家は、作家たるべき資格と、學者たるべき資格とを兼ね有するの人でなければならぬ。即ち前きに文學者たるべき素質として擧げたるもの〻外、學者たるべき、素質をも必要とし、前きに文學者たるべき、修養として掲げたるもの〻外、學者たるべき修養をも必要とするのである。

偖て學者たるべき素質とは如何なるものぞ。大體に於て文學者特に創作家たるべき素質と同じやうなものではあるが、唯だ一つ、智的能力が普通の人よりも傑れて居なければならぬと云ふことがある。即ち概して好奇心に富み、空想にとみ、また大に神經質であつてもかまはないが、智的作用の凡人に傑出したることを必要とするのである、よし其人の傾向が感情的の人であるに

もせよ、大に感情的の人であるにもせよ、智力がまた凡人に卓越して居ることを必要とするのである。

感情的であつて、玄かも智力が凡人に卓越すると云へば、或は矛盾したことのやうに思ふ人もあるかは知らぬが、それは決して矛盾でない。智情意三作用に就いて云へば、感情がとくに傑出して居て、所謂感情的の人物たることを免れない場合にも、尙ほ人は普通の人に卓越したる智力を持つことが出來るのである、殊に精神上能力全體が凡人より多い天才の場合にあつて、此事ある毫も怪むに足らないことなのである。

學者に於て大切なる修養は改めて云ふまでもなく、讀書が第一である。人生の經驗も、また之に對する觀察も必要なことは必要だが、最もまづ必要なるものは讀書である。玄かも、此讀書が前に述べた創作家の場合とは違つて

自分の好むところに從ひ、何でも勝手に選むで讀むと云ふやり方でなく、自分の專門學なり、研究題目なりに交渉あるものは、いやでも應でも讀まねばならぬと云ふ讀書なのである。更に、同じ物を讀むにしても、ちやんと秩序を立てゝ讀むと云ふ方針をとる、所詮學者の讀書には一定の組織が立つて居なければならぬのだ。

ところで、この組織の立つた讀書をすると云ふことは、一般に獨學の風がまだ盛になつて來ない我が國などに於ては、餘程困難なことなので、是はやつぱり學校の教育に依賴する方が安全である。事情の許す限りは、或る程度まで學校に於て正式の訓練を受ける方が得策である。

之を要するに、批評家としての完全なる資格を作る爲めには、まづ創作家となる丈けの素質と學者となる丈けの素質とあつて、然る後之に創作家たる

べき修養と、學者たるべき修養とを加へなければならぬ。乃ちかくの如き素質を有しない人、かくの如き修養をする丈けの根氣なき人は、レッシングの如き、ジョンソンの如き、テインの如き、アァノォドの如き、また今のブランデスの如き大批評家となることは、斷念しなければならないのである。

第十二章　文學上の飜譯

飜譯家の任務と電話交換手——飜譯は文學上第二段の事業也——模倣踏襲の時代——大天才の出づべき時にあらず——飜譯家の資格——外國語と文學の趣味——批評界と飜譯界——亂暴なる飜譯の横溢——吾人の希望

文學は元來、著者と讀者との交渉に於て成立する。而して、著者の言葉が直ちに讀者の耳に達せざる場合、二者の間に這入つて之を取り次ぐもの、即ち飜譯者である。

飜譯者は、いつて見ればまづ、電話の交換手を見たやうなもので、甲の口を乙の耳につなぐより外に、何等の任務を有しない。それより以上のことを爲す必要もなく、また爲す權利もないのである。

乃ち飜譯者は一面原著者のお手傳で、また一面讀者のお手傳である。否、實に文學其物のお手傳として存在するもの、婢僕として存在するものがこの飜譯である。飜譯は決して文學其物でない、少くとも文學上第二段の事業である。

創作の才あり、批評の能あるものは、かゝる第二段の事業を畢生の目的とするに及ばない。少くとも自家の才能が飜譯家なるよりも、創作家たり批評家たるに適せりと思ふ人は、かう云ふ光彩に乏しい事業の爲めに、一生を獻げる必要はないのである。

飜譯は固より大切なものだ。決してそれを否定しようといふのではない。

飜譯は如何なる場合に於ても必要なものに相違ないが、殊に日本の今日の如く、歐羅巴の文化を輸入するに忙しき時代に於て、飜譯のとりわけ重寶が

られるのは無理もないことだ。從つて飜譯の出來る人は、本來創作家にも、批評家にもなつて成れないことは無いにもかゝはらず、要求の痛切なるに促され、また成功を收むるに容易なるところよりして、われも〳〵と競うて飜譯をやると云ふのに不思議はないのである。

又一方から考へて見るのに、今日はとくに文學の上に於て、輸入の時代である。模倣踏襲の時代である。此模倣の文學、踏襲の文學を國民性情の熔爐に入れ、傳統ある趣味の鑄型に流し込むで、渾然たる新日本の文學を作り上げるのは、殘念ながら、此次ぎの時代である。乃ち其醇化大成の時代に備へる爲めに、われ〳〵はせつせと模倣したり、踏襲したりして居るのだ。されば、よし此際、創作家として、また批評家として餘程の天才が生れて來るにしたところで、彼は到底此時代の大勢に反抗することは出來ぬ、かりに多少の

反抗をして、或は創作を試み、或は批評をやつて見たところで、次ぎの時代に現はれる天才の爲めに、吸收せられ、綜合せられて、其背後に隱れて了ふのは明かである。

さう考へると、創作家として、また批評家として今日の文壇に立たむとするものは甚だ心細くなつて來る。むしろ、時代の潮流に從つて、歐羅巴の文藝思潮を輸入したり紹介したりする、飜譯事業の上に一時の功を樹て、其功名心の幾分なりとも滿足させると云ふ方針が、どうも安全なやうに思はれる。即ち、文學史上に永久の名を殘すことが出來ないならば、切めて其當時の文壇に重寶がられ、持てはやされることをやつて見ようと云ふ氣にもなるのである。

何れにせよ、飜譯は本來大切なもので、殊に今日の時勢に於ては一層大切

なるもので、且つまた多少の功名心をも滿足せしむるものでもあるからして、此方面に適して居ると思ふ人はやるがよい。とりわけ創作家としてはさうえらくもなく、批評家としてもさう巧つかりしたことの云へないやうな人で、そして飜譯のうまい人などは、文壇の爲めにも大に飜譯をやつて貰ひたいものである。

飜譯家となるのには、勿論語學の素養がなくては駄目である。其素養が充分なれば充分な丈け、其資格を慥にする。

が、併しながら、語學さへ出來れば、皆誰でも飜譯が出來るかと云ふに、さうでない。醫學上の著書や、工學上の講義を譯するには、醫學工學に關する專門の智識がなければならぬと同樣に、政治界の論文や、經濟界の報道を譯するには、政治學上、經濟上の特殊の智識を有しなければならぬと同樣に、

文學上の飜譯をするに際しては、また特殊の資格あることを必要とする。其特殊の資格とは如何なるものぞと云ふに、創作の飜譯ならば、創作家たるべき素質の幾分と、修養の幾分とが無くてはならぬ。また批評の飜譯ならば、批評家たるべき多少の素質と修養とがなければならぬ。單に外國語さへ出來れば、何の飜譯でもやれるものだと思ふのは心得違である。文學者になる丈けの資格なきものには、やつぱり文學の飜譯も出來ないのである。

ところが、是も批評家と同じで、なか〳〵完全なる資格を具へたものがない。外國語丈けは可なり出來る人であつても、文學の趣味が無かつたり、幸ひ文學の趣味丈けは有つて居ても、語學の素養が不充分であつたり、また相方とも不足があつたりして、兎角、どうも滿足なる飜譯者を得難いのは、誠に是非もない次第である。

が、概して之を云ふ時は、飜譯界には、批評界に於けるほど、人が乏しくない。中には殆んど完全なる資格を有すると云つて差支のないやうな人もある。森鷗外氏上田敏氏を始めとして、長谷川二葉亭氏や、內田魯庵氏や、馬場孤蝶氏や其他自ら飜譯家を以て立たざる諸氏の中にも、飜譯をさせれば立派な飜譯をして見せる人が隨分とある。批評界の寂寞なるに比すれば、むしろ賑かな方であらうと思ふ。

然るに、どうしたものか是等の諸氏は立派な腕前を持ちながら、どん〳〵と飜譯をして見せぬ。古今の名著が、ごろ〳〵ところがつて居るのに係はらず、一向にそれらの飜譯に手をつけず、そのまゝにして居る。實に殘念なことである。

そしてまた、是等の諸大家が、うつちやらかして置く爲めに、それをよい

ことにして、隨分腕前の怪しい飜譯家が飛び出して來て、亂暴極まる誤譯、拙譯、悪劣の譯を以て、出版界を埋めて居る、更に一層殘念なことである。

之を要するに、飜譯なるものは、本來が大切なものである上に、とりわけ今日の時勢、更に一層大切なもので、從つて之を以て功名をなすには最も都合よき時なれば、此方面に適當した人々は、是からわざ〳〵修養をしてゞも、大に活動して貰ひたいものである。吾人は切に之を希望する。

——文學入門終——

附錄

文藝雜話

自然主義と寫實主義

自然主義とは如何なるものか、寫實主義とは如何なるものか、また此二者の間には如何なる交渉關係があるかと云ふことを、新潮社からの御注文に應じて成るべく簡單に、成るべく平易に説明して見る積りである。精細なる自然主義論寫實主義論の決して之に盡きて居ないこと丈けは、豫め斷つて置く。是の如き問題を平易に且つ簡單に説明しようとするのは、隨分容易ならぬ事業であると云ふことをも御承知を願つて置きたい。

抑も自然主義(Waturalism)寫實主義(Realism)は、双方ともに美學上に之を云ふ場合と、文藝史上に之を云ふ場合と、各二種の意味を有して居る。

◎美學上に自然主義と云ふと、客觀自然の模倣踏襲を以て、藝術の能事了れ

りとし、或は人間自然の性情を發揮し、敢へて飾らず、蔽はざるところに藝術の本領ありとするものを云ふ。平たく言へば、有りの儘に寫し、ありのままを談る、是れが即ち自然主義なるものゝ眞髓である。

同じく美學の方で寫實主義と云ふと、之は主として理想主義（Idealim）なるものと相對して用ひらるゝ言葉である。理想主義は其文字の示す通り、頻りに理想理想と云ふ、よし制作の材料は是を現實の世界に取るとしたところで、作家は是非とも其材料を詩化し、美化し、醇化しなければならぬ、換言すれば現實の理想化が必要であると說く、或は具體の理想が藝術の本質であると說く。之に反して寫實主義は、凡べて謂ふところの理想を斥ける、全然斥けないまでも輕視する。そうしてたゞ〳〵現實世界の描寫を以て、さながら藝術上の作品なりとする。之を以てかの美學上自然主義に比するに、自然

主義は其範圍がやゝ廣い。蓋し、自然主義は客觀現實の模倣踏襲をのみ標的とするものゝ外に、尙ほ主觀天眞の流露を期するものをも包容して居るからである。美學上の詮義よりしては、理想主義正面の敵は、自然主義よりも寧ろ寫實主義なること、是れ最も注意すべき事項である。

文藝史上に自然主義と云ひ、寫實主義と云へば、ある特定の時代の、ある特定の流派傾向に命じたる名稱である。而して一般に自然主義、寫實主義なるものは、此意味に於て用ひらるゝ場合が多いのである。

歷史上廣義に之を用ふれば、自然主義と寫實主義との間に限界を立つる必要はない。而して廣義の自然主義寫實主義は古典主義（Classicism）が古代文藝の思潮を代表する如く、ロマンティシズム（Romanticism）が中世文藝の思潮を代表する如く、ともに近代特に十九世紀以降の、歐羅巴も特に獨逸、佛

蘭西、伊太利、露西亞、丁抹、スカンヂナヴィア等大陸諸國の文藝思潮を代表するもの、獨逸語に Die moderne（ディイ、モデルネ）（輓近派）と略ぼ其義を同じうして居るのである。

十九世紀以降大陸文藝の思潮を代表するものとしての自然主義又は寫實主義は、隨分色々の特徴特色を有つて居る。例へば主として現存の社會生活を材料にすると云ふことや、其材料を描くにも、人物の外圍に重きを置き、人間をやはり自然の一角と見做すと云ふことや、所謂興味ある內容を必要としないと云ふことや、故らに意味のないやうなものを選むで材料にとると云ふことや、非常に物の特性を尊重することや個人主義的傾向や、神秘的傾向など、隨分色々の特徴特色を有つて居るのであるが、其中でもとり分け著しいものを擧ぐれば、そが人間の暗黑なる一面を忌憚なく、摘發暴露すると云ふ

ことである、時には好むで人間の獸的性情を表現すると云ふことである。また一般に描寫の際、人をして目のあたり之を見るが如き感あらしめむことを期することである。一言にして之を云はゞ、人間の獸性を印象鮮かに描き出すと云ふところに、主として、輓近派の輓近派たる所以は存するのである。

ところて、此人間の獸性に對して、トルストイ、ストリンドベルヒ、アレキサンダア・ジュマ等二三の人は、今日の發達したる文明が生むだもの、餘りに自然を遠かつた超文明惡文明の所產であると云ふけれど、まづ近代多數の作家は、之と反對の解釋を下す、即ち人間の兇暴殘忍なる性質や、男女兩性間の肉慾的衝動や、奪掠占有の本能や、是等の性情は凡べて皆野蠻時代、未開時代からして今日に傳つた遺風であると說く、更に遡つては人間が虎や、狼や、狐や、狒々であつた時代からの遺風をそのまゝに存して居るものと見

る、つまり進化論的見地よりして、或は一般自然科學者の立場よりして人間の獸性を認めて居たのである。

で、斯くの如き態度は、たゞに人間の獸性を表現する場合ばかりでなく、一般に個人としての人間なり、社會としての人間なりを描き出す場合も必ず持して行つたものである。即ち自然科學者が鑛石を分析するやうに、植物の雄蕊雌蕊を解剖するやうに、蜜蜂の生活狀態を觀察するやうに、極めて冷靜なる態度をとつて、近代多數の作家は、人間を分析し、解剖し、また觀察した。是は單に譬喩ばかりでなく、彼等の或るものは、生理學並びに心理學上の智識を基礎として人間の病的現象を研究した立派な科學者であつたのである。

然るに時勢の推移は、十九世紀の中頃よりかけて、漸く唯物主義大思潮に

對する反動を生じ、其反動は文藝界にも波及して、輓近派の作家はた、從來の如く冷然たる純客觀の態度を保持することが出來なくなり、作物は次第次第に作家の主觀をも盛るやうになつて來た。作物が次第〳〵に作家の主觀をも盛るやうになつて來たとは、つまり、人間の獸的性情を表現するにしてもそれを直ちに自家頭上の事として、眞面目に嚴肅に取扱ふやうになつて來たことである。從來は醫者が病理を研究するやうな態度であつたものが、今は病人が自分で自分の病狀を吟味するやうな態度になつたのである。力のない咳ばかり出て、咳をする度毎に血の混つた唾が出るのを見た時に、どうして平然たる態度がとれやうぞ。——輓近派の作物は痛切なる倫理的意義を加ふるに至つた。

もつとも、倫理的意義を加ふるに至つたと云つたところで、それは勿論現

存の道德に、直接貢献するやうな、所謂勸善懲惡などのやうなものは極めて少く、大抵は社會のあらゆるコンヴェンショナリズム（Conventionalsm）を破壞しても構はないと云ふ位の意氣込ある、忌憚なき倫理觀である、所謂實踐道德の上に超然たるところの第一義の道德觀である。從つて其思想は、懷疑的虛無的と見らるゝものが多い。而して作家の懷疑主義、虛無主義等の人生觀、世界を通して、作物の上に嚴肅なる倫理的意義の加はつたもの、是が即ち狹義に謂ふところの自然主義なのである。這般の倫理的意義を加ふるに至らざるものが、即ち狹義に謂ふところの寫實主義なのである。

狹義の自然と寫實主義とは、內容の上に好むで人間の醜惡なる一面を暴露し、摘發するところ、技巧の上に印象の鮮明を尙ぶところなど、二者殆んど其軌を一にして居るが、其相異るは、一方が純客觀の態度をとつて制作するに

反し、他の一方が稍や自家の主觀を交へて筆をとり、其作物をして倫理的意義あらしめむことを期する點にある。それ故に、見やうに依つては、自然主義は寫實主義の反動とも解釋し得られる。即ち寫實主義が其純客觀の頂上に於て、反動の一歩を主觀に轉じ、一部の理想主義を容れたるものとも說明し得られる。換言すれば、自然主義は純客觀の寫實主義と、純主觀の理想主義とが調和されたもの、二者の總合（Synthesis）である。

以上は美學上並びに文藝史上、廣狹二義に亘つて、自然主義寫實主義を抽象的に說明したものであるが、一々之が實例を擧げて具體的の說明を試みると云ふのは、非常に困難なことでもあるし、またどうかすると、却つて誤解を惹起す恐れもあると思ふから、玆には敢へて之をしない。

近頃我が文壇に於ても、頻りに自然主義々々々々と云つてる人があるやう

だが、其人達は全體どう云ふ意味で自然主義を推奨して居るのか、判然しない。それに各自の解する意が皆同樣でないやうに思はれる。中には美學上に所謂自然主義と、文藝史上狹義に所謂自然主義とを混同したり、文藝史上自然主義に廣狹二樣の意義あることを知らないで居たりする人もあるやうだし、中にはまた、內面的描寫云々の說を立てゝ、寫實主義の新に心理的方面を開拓したものが、自然主義であるなどと論ずる人もあるやうだ。更に太しきは、自然主義とは、人間をさながら自然の一部として取扱ふ態度を云ふとか、人生の露骨なる描寫を云ふとか、云ふやうな說明をして、滿足して居る人もあるらしい。

さう云ふわけで、批評家の自然主義論は頗ぶる要領を得ないのであるが、現に自ら自然主義と標榜して居る短篇の小說などを讀むで見るに、今のところそれは誠に涙のこぼれるやうな幼稚極まる物ばかりではあるけれど、兎に角その期するところは、上述「寫實主義に對する自然主義」の傾向を示さむとするにあるらしい。即ち人間獸性の一端を表現して「印象の鮮かな」、「人生に觸るゝところある」作品を獲たいと思つて居るらしい。

終りに臨み、今一應繰返して斷つて置く、吾人の自然主義寫實主義に對する精細なる議論は、更に他日を期して之を發表する積りである。

象徴主義

(上)

抑も象徴詩と云ひ、象徴劇と云ひ、或は汎く象徴主義派と云ふ、總べて皆作家が自家の感想を發表する上に、象徴を用ふるより命じたる名稱である。乃ち象徴主義象徴派の説明は、先づ其象徴なるものゝ意義よりして始むべきであると思ふ。

Symbol を譯して表象と云つて居る人もあるやうだが、あれは宜しくない。哲學心理學の方で久しい以前から用ひられて居る表象 (Vorstellung) と混同する恐れがあるからである。矢張り標徴もしくは象徴として置いた方が便利であらう。

象徴は美學上聯想 (Association) の一種として説明されて居る。乃ち聯想に狹義の聯想 (Association Vin engerem Sinne)、象徴 (Symbol)、統覺 (Apperception) の三類を分つ。

伊太利から希臘あたりへかけて、所謂南歐の地には月桂樹が甚だ多くあると云ふ。そして北歐羅巴の人達が此地方を旅行して歸る時には、持に此印象を深く刻まれて歸る。それて、彼等は月桂樹と云ふ文字を見、月桂樹と云ふ言葉を聞いた丈けでも、直ちに、思を遠く南歐の風物に走らせるとのこと。是が狹義の聯想である。

又、月桂樹は古來、勝利、凱旋の光榮を表彰するものとして用ひられた。此場合、月桂樹を勝利、凱旋の象徴と云ふ。

それから又、希臘の古い神話に、nymphe の一人 Dryaden と云ふ女神は、

アポロンの神に逐ひ廻はされて逃場を失ひ、身を月桂樹に化して了つたとある。此際月桂樹を見て、女神 Dryadenが成れの果てなりと思ふは統覺である。

右の例に於て、月桂樹は、必ずしも常に南歐の景勝を想見せしむるものではないが、勝利凱旋の光榮は、其葉の一片を手にしたばかりでも、必ず常に思ひ浮べられる。象徴と聯想との區別は是れ丈けでも出來るのである。

月桂樹は、その表はすところの勝利、凱旋の光榮に比して極めて價値少きものであるが、女神 Dryaden の化身として見る場合には、何れを重しとし、何れを輕しとすることも出來ないのみならず、二者は互に對待の埒を徹去して、渾然たる一體となる。更にまた、月桂樹は必然的に Dryaden を想起せしむるものでない。之が象徴の統覺と異れる點である。

直喩(Gleichniss)、隱喩(metayhor)、詞喩、類喩等は右狹義の聯想(Association)

に屬し、個想、類想、並びに擬人の詮義は、統覺(Apperception)の範圍に屬するが故に、是等のものと象徴(Symbol)とを混同してはいけないのである。

象徴は、更に象徴それ自體と、之によつて代表せらるゝ事物との間に存する價値の懸隔如何によりて三類を分つ。乃ち外形內容に輕重の差あること、最も太しきものを嚴密に象徴と云ふ。黑色が悲哀を、白色が無邪氣もしくは天眞爛漫を赤色が熱誠を、綠色が希望を、紫色が權威もしくは尊嚴を表すなど、是である。各母音にそれ〴〵の意味を有たせ、三、四、十等の數にも固有の含蓄あるものとする、或は筆で文を、劒で武を、鎌で死を表し、其他植物や花で種々なる人間の事象を表さうとする、皆是である。十字架は耶蘇敎もしくは贖罪の象徴となり、洗禮は復活再生の象徴となつて居る。佛家の結印は、佛菩薩それ〴〵の屬性を表して居る。文學上に例を取つて云へば、ダン

テが神曲の發端、豹や、牝狼や、獅子やは、人間の肉欲、貪欲、殘忍の三惡を表して居る。イブセンも其社會劇に於て、屢々此種の象徴を用ひた。太陽は自由と美との理想である。『建築師』が高塔の上に掲げむとした旗幟もまた理想である。ハウプトマンの『沈鐘』は、懺悔または良心の苛責である。

次ぎには、象徴の外形が稍や複雑となり、其複雑なる內容と、相並行して發展するやうになれば、價値の上にも二者輕重の相違が減じて來る。之が即ち譬喩(アレゴリイ)(Allegorie)並びに寓意(ファアベル)(Fabel)である。前者は通例人事に之を取り、後者は多く禽獸草木の間に之を藉る。其目的とするところを問へば、前者は大抵心理上說明に用ふるを常とし、後者は主として道德上童幼を導くの方便である。『イソップ物語』はファアベルの好標本である。聖書(バイブル)、莊子等にはアレゴリイが多く用ひられた。ゲエテの『ファウスト』第二篇、ニイチェの『ザラトゥ

ストゥラ』など、また少からずアレゴリイを藉りて居る。

最後に此外形內容の懸隔が全くなくなつて、象徴として取られたる事物それ自體が獨立の價値を有するに至れば、所謂高級象徴(Das Hochsymbolische)である。高級象徴の作品は、其の表面に見えたる事件の進行丈けで、己に藝術上價値がある。精しくは其象徴の裏面に隱れたる含蓄を問はずとも、尙ほ且つ面白く讀むことが出來るのである。ダンテの『神曲』、ゲエテの『ファウスト』、セクスピアの『マクベス』、『リア王』、『ハムレット』等は其適例である。ハウプトマンの『沈鐘』も、全體としては此種の作品である。先年坪內博士が公にせられた『新曲浦島』なども是に近いものである。

偖て象徴なるものゝ意味は、略ぼ以上述べたる如きものであるが、一般に是等の象徴を用ふること多き作物、もしくは中心の技巧を是等の象徴に須つ

ところの作物を、象徴的の作物と云ひ、またその象徴的作物を特に重ずる傾向あれば、其傾向に名けて象徴主義と云ふ。但し、是は一般に云ふところの象徴主義である。之を以て直ちにかの、歐洲輓近の文學史上一流派をなすところの、所謂象徴主義（サムボリズム）を推すことは出來ないのである。

輓近思潮の種々なる流れが、大抵は皆其源を佛蘭西に有する如く、象徴主義もまた、まづ佛蘭西の文壇に現はれた。先頃死むだユイマンと云ふ人は、もと自然主義の大立者、ゾラの門から出た人であるが、自然主義を陳套取るに足らずとして、一八八七年ゾラの許を去り、別に一味の團結を作つた、之が象徴主義の一流派として立つに至りたるそも〳〵であるとも云ひ、或はジェラアル・ドゥ・ネルヴルや、シャルル・ボドレエル等の作品に於て、最も早く象徴詩の萠芽が見えるとも云ふ。何れにもせよ、此流派一たび起るや、如上の諸家

を外にして、ル・コント・ドゥ・リイル、ホセ・マリア・ドゥ・エレディア、ヱルレエス、シュリ・プリュドン等の作家を得て、忽ち佛の詩界を風靡し去ると共に、一方に於ては、墺太利人、ヘルマン、バアルによつて獨逸、墺太利に傳へられ、更に大才マアテルリンクの白耳義に現はるゝに及むでは、愈々侮るべからざる勢力となつたのである。

象徴派が其本領として主張するところのものは、如何なるものであるかと云ふに、それはかうである。

十九世紀末人心内部生命の奮鬪苦悶を經驗したるもの〻人生觀世界觀は、尋常普通の手段を以て之を發表すべく、あまりに深酷であり、あまりに幽玄である。所謂言語の道絶えたるものである。で、是等の深酷幽玄なる人生觀世界觀が、刹那々々に生むところの情緒只だこの情緒の匂を傳へるより外は

ない。其情緒の匂を嗅いだ人が作家と同一の人生觀世界觀を會得するや否や、それは敢へて問ふところでない。また敢へて問ふこと能はざるところである。と、是がまづ第一の主張。

次ぎに、詩文に於ける情緒の價値を誇大して云ふやうは、

人間がある事件に遭遇すると、ある一種の情緒を生ずる。それを表現するのが元來詩人の任務である。事件其物を描寫するのは詩人の役目でなくて、記錄係、通信員の事である。また其事件に關して獲たる明確なる思想を述ぶるは學者、思想家の仕事である。――一言にして云へば、詩は情緒より外にないと。

若し從來の詩文が、繪畫彫刻の作用と、音樂の作用とを兼ねて居たものとすれば、此派の詩人は、詩文をして、純然たる音樂たらしめんとするものである。情緒藝術の名を以て呼ばるゝ所以である。

ところで此情緒藝術の作家が、其情緒を他に傳へむとするに際し、用ふるところの手段は何であるかと云ふに、それは即ち前述の象徵である象徵は彼等に取つて、よし唯一の技巧に非ざるまでも、最も大切なる、また最も多く用ひらるゝところの技巧である。而して彼等が象徵を重ずるの甚しき、其初めは、自家懷抱するところの縹渺たる幽趣微韻を盛るの器として用ふるに過ぎざりしを、漸く其物自體に、潑溂たる生命あるものと見るやうになり、竟にはかの耶蘇教徒の、十字架、洗禮、晩餐式に於ける如く、佛教徒の佛菩薩の諸像に於ける如く、神秘的意義を之に見出すやうになつた。象徵主義一帶に神秘あるは、其世に現はれたる當初に於て夙く已に萠芽を存しても居たらうし、また各作家が內部生活の奮鬪苦悶を加ふるにつれて、愈々發展し來つ

たものでもあらうけれど、一面よりして之を見れば、象徴的技巧其物の尊重、また這の尊重に伴ふ進歩其物が、自からこゝに至らしめたものなのである。

右象徴主義の本領とするところに由來して生ずる特色、並に他の種々なる事情に原因する特徴を少しばかり次に擧げて見よう。

（下）

象徴主義の作品には、先づ概して、晦澁朦朧を以て難せらるゝものが多い。蓋し、象徴藝術即ち情緒藝術は、その期するところ專ら情緒の表現にあり、敢へて一定の感情や思想を叙べようと思はないからして、少くとゝ是等のものに重きを置かないからして、之を讀まされる人は、丁度音樂を聞いた時と同じやうな、或はそれに近い心持になる。乃ち普通の詩文に對するときの眼を以て之を見れば、何のことだか解らない、不得要領である。晦澁朦朧と云

はれる所以である。

象徴藝術もとくに象徴詩と稱せらるゝものが、晦澁朦朧なるは、此派の人々の人生に對する考方が、あまりに耳新しく、其技巧があまりに目新しいとか、彼等の頭腦が本來透明を欠いて居るとか、其他種々なる理由に基くことであらうけれど、兎に角右に述べたる理由が其第一であることを忘れてはならぬ。

象徴詩の主として短詩形を尙ぶこと、、是れはた怪むに足らぬ。痛切なる人生觀や、世界觀や、其物自體を發表することは所詮出來ないからして、其人生觀世界觀から迸り出づる、刹那々々の情緒を表現するのが、詩人唯一の任務と考へられて居るからである、かくの如き情緒の閃きを傳ふるには、短小の詩形を用ふるのが、最も必要で、また最も便利であると考へられて居る

からである。象徴派の人がもし長いものを書けば、大抵は其一部分丈けが象徴藝術である。

象徴派の人ばかりとも云へないが、特に此派の人々は、世間普通の標準より見て道徳心が鈍い。他からしてさう思はれて居るのみならず、自からまたさう思つて居る。時には非常に之を誇大してまでも考へる。デカダン派(Dicadents)なる名稱は、世間から貰つたとよりも寧ろ自分でつけたのだ。そして彼等はこの道徳意識の鈍くなつた原因を、世紀末(Fin de siecle)と云ふ、特殊なる時代の責に歸して、暗々裏に自家の立場を辯護すると共に、また一方では、かくの如き時代の影響を受くること大なれば大なるほど、其感受性の鋭敏を榮として居る。

神經質は固より彼等の特徴で、また實に其誇りである。

併しながら、神經質の反面は、やがて神經の疲勞を意味するもので、疲勞したる彼等の神經は、宛かもかの、官能の慾をあまりに縱まにした人などが、尋常の手段では其快感を買ふことが出來ない爲めに、無暗に辛いものや、澁いものや、臭いものや、時には無氣味なものきたないものを注文すると同じやうに、あたりまへの享樂を享樂と感ずることが出來なくなつて、たゞ强烈なる刺戟を强烈なる刺戟をとのみ求める。太しきに至つては、健全なる人々が、往々にして苦痛と感ずるやうなもので、それが强烈なる刺戟であると云ふ丈けで、彼等の遺ひ古した神經の餘力を聊かにても興奮し得る爲めに、好ばるゝことがあるのである。

强烈なる刺戟を追求する彼等の、自然の推移、平板な、單調な、きまりきつた自然の推移に堪へ得る筈はないので、一體に自然と云ふこと、いふものを

厭忌し、排斥する。そして人爲人工を以て自然よりも望ましいものとする。

この非自然主義、技巧主義は、彼等の藝術と並びに其生活との兩面に亘つたもので、藝術上には情緒の表現を主とする丈けに、對象としての自然が蔑視せらるゝは勿論、其情緒を表現する方法が隨分とまた自然を遠かつて居る。少くとも技巧の價値を是ほど重く見るものはない。生活上には自ら求めて波瀾曲折のある、刺戟の多い生活を送らうと心掛けて居る。わざ〳〵自分の戀人をふり棄てゝ、他へ緣付かせて置いて、故らに失望したり、嫉妬したりするとか、或は自分が他人の上に加へた損害の左程でもないのを、わざ〳〵誇大して吹聽したり、大袈裟に懺悔をして見るとか、また一體に自ら惡慾がつて喜ぶとか云ふやうなのが即ちそれである。

自然の單調平板なる推移に堪へられなくなつた彼等は、また一方に於いて常識を離れた空想、とくに神怪幻奇の空想を好ぶ。乃ち從來しばらく放棄されて居たロマンチックの題材が、彼等によつて再び拾ひ上げられるやうになつた。新ロマンチシズム、新理想主義は近代象徵主義の一面である。少くともその一面に於て深い交渉がある。

象徵主義一帶に神秘傾向があるのは前に已に述べた。彼等の象徵を用ふる時、所謂萬物照應(Correspondance)の理に基いて、其象徵と、之によつて代表せらるゝ內容との間に神秘的聯鎖ありと見る、換言すれば象徵は手段にしてまた同時に目的なりとやうに考へるところ、特に注目すべき點である。

次ぎに今一つ、象徵主義作品に最も著しき特徵としては、官能と、感情と、並びに思想との交錯矛盾と云ふことを擧げなければならぬ。

『甘き香』に酔ふと云ひ、『つめたき響』と云へば、官能と官能との交錯である。『哀しき色に』と云ひ、『深紅なる思』を運びと云へば、官能と感情との交錯である。『鬱憂のよろこび求め』と云へば感情上の矛盾である。メレジュコウスキイの『熱想』(Passionate Thought)は感情と思想との交錯である。『非凡なる人』と云へば思想上の矛盾である。『灰色の思索に耽り』と云へば思想と官能との交錯である。象徴主義の作品には、この種の交錯矛盾がみち〳〵て居る。

我が日本の新體詩界にも、此兩三年來だいぶ象徴主義、象徴詩等の呼聲を聞くやうになつたが、もし我が作家諸氏にして、實際に、多少でも象徴主義的傾向を追うて居るとするならば、それは主として此交錯矛盾を好ぶと云ふ方面に於て云はるべきことであらうと思ふ。近頃泣菫調やゝ衰へて、有明調

の大に行はれて居るらしいのは、やがて詩壇に於ける象徴主義の普及を表明するもので、また實に右の交錯矛盾をもてはやす風が、殆んど新技巧の總體でゞもあるかのやうに思はれて居る証據なのである。

近代象徴派なるものゝ本領とするところ、また其特色とするところは、略ぼ以上述べたる如きものであるが、最後にこの流派傾向が、輓近文藝思潮の中核たる寫實主義自然主義に對して如何なる位置に居るか、之と如何なる交渉を有するかと云ふことを論じて、此講話を終へようと思ふ。

象徴主義を主張する人達自らは、此流派を以て從來の自然派に慊らないで起つたもの、即ち自然主義に對する反動なり、反抗なりとして居る。が、しかし、吾人の見るところを以てすれば、象徴主義は必ずしも自然主義の反動反抗と見なければならぬと云ふ理由はない。象徴主義の或る部分はなるほど

彼等の云ふ通り、自然主義に對する反動らしく、また反抗らしく見えるけれど、他の部分は、其重要なる部分は、寧ろ自然主義を繼承し、もしくは之を極端にしたものなのである。

『自然主義と寫實主義』に於ても說きたる如く、人間生活の暗黑面を描寫して、觀照の明劃を期すると云ふのが、自然主義寫實主義の本領とするところであつた。しかるに今象徵主義の象徵主義たる所以は、その中心の技巧を象徵に藉り、專ら讀む人の情調に訴へむとするところにある。已に殆むど描寫の意義を認めなくなつて居るのである。自然主義寫實主義を通じて、普遍の特徵たる觀照の明劃と云ふことは失はれて了つた。此點から考へて見れば象徵主義は明かに自然主義寫實主義に對する反抗である。寧ろ繪畫的に傾いて居た文學を、音樂的にしようとする努力は、また實に一種の反動とも見られ

ないことはない。

けれどもまた、他の一面よりして之を考ふれば、所謂寫實主義の純客觀的態度より、所謂自然主義に來て、多少の主觀的傾向を加へたる輓近思潮の大勢は、この象徵主義に及むで愈々主觀的となつたもので、その觀照の明劃を放棄するに至つたのも、つまりはこの主觀的傾向の極端に走つた結果の一つに外ならぬ。

更に象徵主義が一種の神秘主義であり、理想主義である點から考へて見ても、またそが依然として、人間の獸性を忌憚なく暴露すると云ふ方針を繼續して居る點から考へて見ても、吾人の所謂自然主義の倫理的傾向を誇張したるに原づくべきは、想見するに難からざるものがある。

されば吾人は、象徵主義者自らが、よし何と云はうとも、そんなことには

一切頓着なく、象徴主義は寫實主義、自然主義の流を汲むものである、少くとも同一系統に屬するものであると斷言する。殊に自然主義とは非常に密接なる交渉があつて、まづ大體の精神に於ては、同一傾向を追ふものと見て差支ないやうに思ふのである。

それでも、若しこの象徴主義なるものが、非常にすばらしい勢力を獲て、最近文藝思潮の中堅になつて居るとでも云ふのならば、之を自然主義の領域外に置くの必要も、便宜もあるかは知らないが、吾人の見るところを以てすれば、時代は尙ほ自然主義の時代である。少くとも吾人謂ふところの自然主義の時代である。ハウプトマンに『ハンネエレの昇天』や、『沈鐘』の如き象徴主義的作品があると云つても、イブセンの晩年に象徴主義的傾向が見えると云つたところで、それは『ファウスト』以來の象徴主義である、否な『ハムレット』や、『リヤ王』や、『マクベス』以來の象徴主義である。嚴密に今の所謂象徴主義を以て律すべきものは殆んどない。マアテルリングの如きも、壯年時代に於て盛んに作つたと云ふ叙情詩は知らず、近頃有名なる『盲人』や『侵入者』などの脚本は、所謂象徴詩などと大に趣きを異にして居るもの、所詮全體としては高級象徴の作品で、其神秘的人生觀世界觀の意義はとにかく、作品の形式より云へば、何も事新しく取立てゝ云ふべきものとも思はれぬ。ダンヌンチオにも幾分か象徴主義的傾向が見えないではないが、是れはた自然主義的の描寫が便利ならざる場合、局部的に折々象徴主義的技巧をかりると云ふまでのこと、全體としてはやはり自然主義者である。象徴主義の作品をかいてもやはり大體は高級象徴の作品である。しかして根本の精神は此場合にも依然として自然主義者である。その他何れの大作家に就いて見るも、特に

彼等が小説脚本の作家として立つ場合は、大抵皆自然主義者である。

象徴主義によつて全く征服せられたる領土は單に叙情詩のみである。他は技巧の上に多少の刺戟を與へ、影響を及ぼしたと云ふに過ぎぬ。この刺激と影響とによつて、近代の作家から再び高級象徴の大作を獲るに至つたのは、大に慶ぶべきことではあるけれど、要するにそれは謂ふところ象徴主義の勝利を意味するものでない。

で、かくの如き事情もあるからして、旁、象徴主義を寫實主義自然主義の流を汲むものと見做し、或は自然主義の一變體として説明するの便利こそはあれ、自然主義に對する反動として、また反抗として之を見るの必要はない。自然主義は大陸文藝思潮の中堅である。象徴主義は其一局部に生じた一小波瀾に過ぎないのである。

趣味の廣狹

趣味なるものは必ずしも其廣きことを要せずと云ふのが、本論の主意である。時には趣味の稍や偏狹なのが好都合であると、斯う云ふ結論を付ける積りである、『趣味の廣狹』など丶餘り奇抜でも無き相な此題目丈け一瞥して、直ちに内容の全體まで臆斷されるやうな事があつては困る。

此處で趣味と云ふ言葉を稍や漠然たる意味に用ひた。或る場合には音樂とか、造形美術とか、詩文とか、藝術上諸部門に關して云ふこともあるし、また或る場合には優美、壯美、悲壯、滑稽等の如き各種の審美的情型に關して云ふこともあるし、また或る場合には何々派とか、何々主義とか云ふやうな「シューレ」や「イズム」に就いて云ふことなどもないではない。

偖斯の如き雜漠なる意味に於て、世には趣味の廣いと云はれる人と、趣味の狹いと云はれる人とがある。或る人は目に見、耳に聞く凡ての事物に對して、常に興味を感じ、時には全く相容れないやうな兩極端の趣味をも同時に併有して居る。之に反して或る人は其興味を感ずること甚だ狹隘なる範圍の中に限られ、繪畫は面白いが音樂は一向面白くないとか、繪も音樂も共に解らぬ、解るのは唯文學丈けだとか、文學でも「クラシッシュ」なものはつまらぬ、矢張り近代的な、而も散文でなくてはいけないとか、極めて偏狹なことを云ふ。

斯樣に廣いもの、狹いものと列べて見ると、どうしても廣いものゝ方が狹いものよりも立勝つて居るやうに思はれるのは自然の人情であらう。けれども世の所謂趣味の廣いと云ふとは、そんなにまで誇るべき事柄であらうか。

又、世の所謂趣味の狹いと云ふとは、そんなにまで恥づべき事柄であらうか。是は少しく考へて見る必要がある。趣味は常に廣くなければならぬか、常に狹くてはいけないか、是は慥に問題である。

バイロンは彼自ら屢々 "Cold Compositions of art" (藝術の冷たき構想)を呪詛した如く、專ら情熱の文字を以て終始したる詩人である。彼は究竟アポロンの寵兒ではなくして、寧ろディオニゾスの氏子であつた。而も其歌ふ所の題目は殆ど凡ての場合に於て戀愛であり、其調は常に沈痛熱烈であつた。吾人の寡聞なる、バイロンに詩文以外如何なる好尙があつたかは知らないが少くとも文學上彼の生命は、徹頭徹尾、謂ふところバイロン風の詩文にある。廣い狹いも比較上の言葉であるが、兎に角詩人としてのバイロンは餘り趣味の廣きを以て誇り得べきやうなる詩人であつたとは思はれぬ。

ゲエテの如きは隨分長い傳記を有する詩人である丈けに、『ゴエッツ』や『ウェルテル』を書いた時代より、『ファウスト』の第二編を書き終つた晩年に至る間には、趣味好尚の上に非常なる變遷推移あり、從つて之を一纏めにして見るときは、隨分豐富な『ヴァライティ』の存すること勿論ではあるが、しかし、是とても長い傳記の各一節々々を横斷して其斷面を檢したならば、可なり偏狹なる特殊の思潮の傾向や、流派の臭味などに牽ゐられたことが少からずあることであらう。

沙翁はそれ自身が宛ら一個の自然であるとまで稱せられて居る、而も吾人の見る所に依れば、自然それ自體にも發展の歴史がある如く、沙翁にも矢張り向上變遷がある。彼が『ロメオ・エンド・ジュリエット』を書いた時に『ロメオ・エンド・ジュリエット』をかいて『ハムレット』を書かなかつたのは、決して

偶然の事情に原因したもので無い。又彼が『ハムレット』を書いた時に『ハムレット』をかいて『マクベス』を書かなかつたのは、決して理由の無い事ではない。彼の創り出したる豐富極りなき人間性格の見本も一つ〳〵に取つて見れば、各作者がその時其時の興味を代表して居るので、詮ずる所セクスピアの如きすら、其一時期一時期に於ては各異なる趣味に支配されて居たことは確に推斷し得られるのである。

元來趣味と云ふものは時と處と人とを異にするに從ひ、各其尚ばるるところの一樣ならざるものである。大きく云へば、或る時代、成る民族、或る地方、或る人の別あり、小さく、個人の傳記を世界歴史の縮圖と見立てゝ云へば、固より場所の關係丈けは存しないけれど、兎に角、或る時期に於ける或る人の趣味と限定を置いた上でなくては、如何なる趣味と言ふことが出來ぬ

從つて、一個人の全生涯をして世のあらゆる趣味を代表せしむることが、已に〳〵困難なる上に、更に又、或る一時期に於ける一個人の趣味をして、其人全生涯の趣味を代表せしむることがむつかしいとならば、世に自ら趣味の廣さを誇るものがあるとしたところで、其廣さたるや、大抵高の知れたものではないか。

あらゆる種類の趣味を、一人の人に、一時に持てと强ゆるのは誠に無理な注文である。吾々十九世紀末に生れたものが、所謂『世紀末』の思潮にかぶれ、日本人である爲めに、西洋音樂が一向に解らず、青年である爲めに、概して「クラシッシュ」なものに對する同情の少いと云ふのも、又、一般に吾々各自が、吾々以外の何人ともちがつた趣味を有して居ると云ふのも、更に又、吾々各自が昨日まで有つて居た好尙と異なれる好尙を今日有つと云ふのも、

是等は凡べて皆正當なる吾々の權利である。斯くの如く種々なる事情なり、性格なりに依つて、人が特殊の偏つた趣味を有すると云ふのは、啻に何等の不都合な事がないのみならず、時には寧ろ大に必要なことさへもあるのである。

總じて、餘りに趣味の多方面に亘れる人、何でもかでも興味を感ずるやうな人は、「ディレッタント」としては兎に角、純藝術家としては、時にそれが輕からぬ短所となる。蓋し、かの何でもかでも面白い〳〵と云ふ人は、確定したる興味の中心點を有せず、一事に一心を傾注することの出來ない人なので從つて斯くの如き氣の多い、熱の乏しい人は、兎角纏まつた活動をする機會と根氣とが無い。乃ち、一つの製作に取り掛つて居る際、まだそれが完成し切らない中に、夙く已に他の異りたる趣味が襲ひ來り、爲めに常に直往邁進

の氣を殺がれ、熱中狂奔の勢を挫かれて仕舞ふのだ。畫人レオナルドオ・ダ・ヴィンチは實に千古の偉人である。而もかれが如きの偉人を以てして、尙ほ且つ多端に過ぎたるの趣味累をなし、其死後殆んど一個の完成品をも殘さしめないで仕舞つたではないか。

藝術上の正面活動はどうしても少しく趣味の偏した人、少くとも或る一定の期間は可なりに偏し得られる人に於て、最も多くを望み得られる。されば作家で他の他家の作品を好く言はぬのは、强ち彼が嫉妬心にのみ基くものとは爲し難い。他の流派や、他の作家や、時には自分が過去に製作したものをも、口を極めて痛罵し非難するのは、才能ある藝術家に於て屢々見受けるところの、寧ろ賴母しき特質なのである。

批評家は勿論作家と違つて、趣味の廣きを患ふること全く無いと云つても

宜しい。蓋し批評なるものは、よし批評家其人の個人的好惡の情にのみ專ら基礎を置くものに非ずとした所で、少くとも此趣味性に訴へたる評價と云ふものが、其基礎の最も重要なる部分を占めて居るのは勿論である。從つて趣味の廣狹が批評家の批評家たるべき資格を限定すること少くはない。けれども、趣味の廣いと云ふことが必ずしも批評家の批評家たるべき唯一の條件でないと同樣に、趣味の餘り廣くない批評家も又全然存在の必要がないことは無い。

趣味の狹い批評家と雖、自ら其狹きことを自覺してさへ居れば、格別大なる過ちは無い。音樂の事を知らなければ、音樂界に喙を容れないで置けば濟む。韻文を解しなければ韻文に對して、劇に通じなければ劇に對して沈默を守つて居れば不都合は起らぬ。又、同じ文學ならば文學の上で、尙ぶ所の思想

感情等の偏したる場合には、勢ひ自家趣味の範圍を超越して言說を試みなければならぬやうなこともあるけれど、此場合と雖、彼にして若し、自己の趣味を以て直ちに他を律するの本來非理なるを覺悟して居るならば、少くとも議論の際、態度の上に寬容なる態度を取り得るが故に、其批評はたとへ有益ならざるまでも、尙ほ無害なのである。

更に一面から見ると、時には隨分趣味の偏狹な、折々理不盡なことをも云ひ兼ねないやうな批評家もなくてはならぬ。

古來批評家と云へば、誰しも先づレッシングを擧げ、ベエコンを擧げ、ヘヅリットを擧げ、ハマアトンを擧げ、テエンを擧げるのであらうが、併し我々は是等の模範的批評家に於て望み得られなかつた或物を、かの趣味好尙の寧ろ偏狹な好惡の情の無法に烈しいショオペンハウエルや、レエックやカアライル

等に依つて與へられたのではないか。抑も狂熱の情は偏執の人に多く、世を動すこと大なるものは狂熱の情である。偏執の批評家亦時になかるべからずだ。

之を要するに藝術發展の歷史全體に就いて云へば、趣味は勿論單純でないまた單純であつてはならぬ。けれども或る時代、或る民族、或る地方の趣味はそれ〴〵に稍や偏つて居ても構はぬ。またよしや、一時代、一民族、一地方を通じての趣味は餘りに「ヴァライティイ」に乏しくては困るとしたところで其時代、其民族、其地方に屬する一個人の趣味はだいふ偏つて居ても宜しい。またよしや、一個人にても其全生涯を貫いて千篇一律の趣味に拘泥すると云ふのは、餘り面白くないとしたところで、猶ほ其人が或る時期の間、隨分偏狹な趣味に捉へられて居ると云ふのは、何等の不都合なことも無いのである

曾に不都合でないのみならず、時としてはかく偏狹な方が却つて便利な場合であるのである。

乃ち、世の藝術家にして、常に、餘りに多方面の趣味を有し、あまりに多くの傾向に同情し、あまりに多くの流風を慕ひ、從つて、常に餘りに多くの事を試むる人は、少くとも作家としては、到底大作の出來ない人なのである。

家庭に於ける文學の趣味

小さい時から手癖が惡く、大きくなつては放火、强盜、殺人と、世に惡事と云ふ惡事の何一つ仕殘さぬ大惡人でも、不圖したことから、前非を悔い、生れ代つたやうな眞人間に立歸ると云ふ例はあるが、憐むべし、木曾冠者義仲、木曾の山奥で鹿猿と一所に育ちし身の、どうしても都の人の眞似は出來ず、後の代までも數々の笑を殘した。善惡の性代へ易きを云ふに非ず、人間趣味の生活の、より多く移し難きを說かむとするのである。

道德上の修養は、可なりの成長を遂げてからでも間に合はぬことはない。加之、餘り小さい內から、難しい敎訓などを無暗と注入するのは、寧ろ考物である。反之、趣味の開發敎養は、是非とも其の搖籃の中からして始められ

ねばならぬ、母の乳房と共にふくませられなければならぬ。

小さい時、全然趣味の教育を受けなかつた人は、よし彼が一人前の人物となり、社會に活動を試みるやうになつてから、あわてゝ其開發を計らうとしたところで、それはもう駄目である。間に合はないのである。

今日社會の上流、中流に立つて居る人、別して高級の官吏、政治家、實業家等は、其趣味好尙の低劣實に酷しきものがある。低劣と云はむよりは寧ろ全く缺如して居る。詩文はもとより、音樂でも、美術でも、乃至は自然の美しい景色でも、凡べて彼等には解らぬ。解るのは、單だ下等な、不潔な、明るいところでは口にもされないやうな娛樂ばかり。彼等の不行儀はつまり此無趣味と云ふことの異名なので、從つて吾人は彼等が道念の低きを咎める前に、まづ其極端なる趣味の墮落を憐まなければならないのである。

驕つて之を思ふに、今の貴族と稱し、富豪と呼ばるゝ人達の、かれが如く低劣なる趣味に陷つて居るのは、もしくは留つて居るのは無理もないことだ日本最近代の歷史が、彼等をして自から是に至らしめたのである。彼等は實に維新前後の大破壞の世に生れ、其大破壞のあとの生々しい、無秩序の社會に於て大きくなつた人である。彼等が當年の家庭に趣味があつたか、なかつたかは已に迂濶な詮義なので、實際、彼等は全然家庭の人でなかつた。家庭を持つて居なかつた。乃ち全く野育ちの人間であつたのだ。

已に其少年、青年の時代を野育ちで人となつた彼等のことゝて、今日よしや後馳せながらも趣味を養ひ、上品な人格を作らうと云ふ感心な心掛を起すものゝあつたとしたところで、それはもう間に合はぬ。世の中に何が俗惡なと云つて、新華族の園藝、俄分限の骨董ほど、思切つて俗惡な趣味を發揮した

ものは無いではないか。所詮、趣味の生活に於ては心機の一轉と云ふことが望まれないのである。

偖て此趣味なるものは、色々のものに亘つて之を云ふので、詩歌文章を讀むのも趣味であれば、音樂を聽き、繪畫彫刻を觀るのも趣味である。又、自然の風色を賞し、人情の機微に觸れるのも同じく趣味なので、人は各々其性の向ふところに從つて、或は彼に行き、或は是に就く。何れを取つて、何れを捨てると云ふわけにはゆかぬ。けれども、さう云ふ間にも、最も多數の人の最も接近し易く、また興味の最も多方面なるものは、實に文學、即ち讀書の趣味なので、殊に家庭に於ける趣味のしては、是が最も廣く、最も便利なものであるかと思ふ。

所で、其家庭に於ける趣味として最も便利なる讀書は、抑も如何なるもの

を其材料にとるべきか、此事に就いて一言して見たい。

勿論家庭の趣味と云ふ以上は、一家團欒して讀むやうなものでなければならぬ。乃ち家族の中の誰れにもかれにも面白いやうなものでなければならぬ。併し、だれにも面白いやうな讀物を求めると云ふことは實際上困難である。で、それが出來ぬ時は止むを得ないからして、大人は子供に、男は女に多少の讓歩をする。換言すれば大人や男子にはそんなに面白くなくとも多少の我慢をする。と云ふのは、家庭なるもの、本來女や子供の爲めにのみ存在するものではないとしたところで、兎に角、男子や大人は家庭以外にも世界を有して居ると云ふ見地からすれば、どうしても家庭の興味は女子と子供とが一番多く持たなければならぬわけで、從つて男子もしくは大人は出來得る丈け女子と子供に對して讓歩すべきであるからだ。要するに家庭に於ける讀書は先

づ婦人と子供との興味並びに理解力を標準とす可きである。

次ぎに、趣味なるものは直接の利益を目的とするものでないからして、讀書も其所謂功利を求むるに急いではならぬ。特に狹義に所謂教育上效果の有無をやかましく云ひ過ぐるの弊を避けなければならぬ。材料は主として、讀むものに面白くあればいゝ。明かに有益ならざるも、また明かに有害ならざる限りは。

婦人は元來感情的性質を有すと考へられて居る。で、或る人は、婦人に感情的なものを讀ますのはいけないと云ふ。是は取るに足らざる愚論である。感情、とくに柔かでやさしい感情は婦人の生命である。感情其物が賤しい穢い感情でない限りは、もし婦人が感情に走つて過ちありとすれば、それは實に女らしい過ちである。美しい過ちである。智に偏し、意志に局して過ちの

小ならむよりも、寧ろ、婦人は情を縱つて大なる、しかも婦人らしい過ちを犯す方が望ましい。長い議論は他日に讓り、兎に角、婦人の讀物としては、清純なる叙情詩、可憐なる物語類をすゝめたい。

子供は空想的である。だからしてあまり空想的なお伽噺などは讀ませぬがいゝと云ふ人がある。之も愚論取るに足ぬ。空想はあらゆる事業を計畫する根源である。文學美術のみには限らぬ。凡べて獨創、發明、發見の重せらるるところには、空想の偉大なる力が尊まれずには居らぬ。若し多數の人々の中に少數の人が、空想的讀物の爲めに將來を過たれたとすれば、それは止むを得ざる文明の犧牲である。子供には大に架空のお伽噺、妖怪談等をよましても宜しいと思ふ。

總じて此讀書の選擇と云ふことを云へば、かう云ふ物を讀ましても好いと

か讀ませられぬとか、甚だ消極的方面の考量にのみ偏り易いが、あれは面白くない。此書物は是非讀ませなくてはならぬとか、いや、讀ませないでもいいとか云ふ方面にも注意を拂ふ必要がある。勿論、惡書の害は認めなければならぬ。しかし、その方の警戒にのみ專ら心を勞するよりも、良書、善書を讀ますのに骨を折る方が遙かに效果が多い。――で、家庭の管理者たるものは、常に女子供に興味あり、理解し易く、且つ健全なる書物を見付けることに努めなければならぬ。

家庭に於ける文學趣味の敎育は、一面、人の品格を作る上に大切であると共に、また他の一面は、文學の社會的勢力を助長し、並びに作家が家庭に於て受くるところの感化を通じて、內容其物の發展に貢獻するものである。

小說に對する首都の勢力

最近小說壇の傾向と云へば、まづ如何なるものが在るであらうかと尋ねた人があつた。むづかしい問題である。

傾向は勿論あるに違ひない。何かあるに違ひない。をかしそれが丁度今の文壇に特有な、各作家に共通な、ある纏まりのある、所謂最近小說壇の傾向であるか、どうかは一應吟味を遂げなければ分らぬ。元來如何なる場合にも、何々的とか云ふやうな、はつきりした名前の附く傾向があるものではないのだから。

戰後の文壇などと云ふ言葉は、言葉としては厭な言葉であるが、をかし事實上此日露の戰役を境域として、明治の文學史上、可なり際立つた前後の二

時期を劃することが出來るらしい。昨年あたりより懸けて一般に創作界は色めいて來た。殊に小説の方では新しい作家も出た、新に小説へ轉じて來た人も出た。之と共に舊い作家も漸く覺醒の眼を開きかけて來た。隨分長いものも出て居る。大に毛色の變つた描寫の方法も用ひられて居る。よし期待したほどの成功は收められなかつたまでも兎に角、思切つて意味の深い、嚴肅な、又それ丈け困難な題目を選むだのもある。是は確かに注目を値する新しい現象であるが、玄かし此新しい現象は單にそれが新しい現象と云ふに止る。此新現象の中に存する、諸家共通の、また當今に特有なる傾向は何であるか。又そんなものが果してあるか、ないかと云ふ問題は全く別問題なのである。

而して此問題は目下のところ、我々に取つて、稍やむづかし過ぎるかと思ふ。一人々々の作家に就いて云へば、風葉子の小説は此頃かく〳〵の傾向に

從つて居るとか、秋聲、春葉、諸子各の物はどうとか。天外、柳浪諸子の物はかうとか、それは云へないことはないけれど、作家全體は愚か、所謂新しい作家としての藤村、漱石諸子の近業すらも、それに共通なそれを統一するやうな傾向を指摘することは餘程困難である。若し强ひて擧げやうとすると、部分を以て全體を代表せしむるの誹を免れぬ。

偖て以上の如き長たらしい前置きしたあとで、玆に一言して見たいと思ふのは「小説に對する首都の勢力」と云ふことである。コンクリイトに云ふと、此東京の風俗なり、習慣なり、言語なり、また氣質なりが、今の小説に對して有する勢力、今の小説の上に及ぼせる影響の消長と云ふことである。乃ち從前はそれがどれ丈けのシグニフィカンスを有して居たか、今はそれがどうなつたかと云ふことである。是は何も最近小説壇の傾向を説かうとするのでは

ない。どうか其積りで讀むで戴きたい。

先づ一口に用向き丈け言つて見れば、從來明治の小説なるものは、概して「東京の小説」と云ふべきであつたのが、近來に至つて漸く「日本の小説」と云はれるやうになりつゝある、是なのである。

故十千萬堂氏が「俺の小説は下宿屋の二階に轉がりながら燒芋を嚙ぢつてるやうな手合には味が分らぬ」と云つた時代には、作者は無論チャキ〳〵の江戸兒であつた。江戸に生れないまでも、その江戸に生れなかつたのを終世の恨事と思ふほどに好きな江戸の、江戸がりたい人々であつた。讀者の數も割合に東京に多くあつたものである。ところが後だん〴〵と『不如歸』の浪子や、『己が罪』の何やら夫人が滿都の子女の紅涙をしぼらすやうになり、『魔風戀風』が『金色夜叉』よりも餘計に賣れるやうになつて來ては、更めて云

ふまでもない讀者の大部分は固より田舍者である。作者の方でも田舍出の人がだん〴〵と多くなつた。さかも餘程東京化しない田舍出の作家も少からず現はれた。われ〳〵は此變遷に對して趣味好尚の墮落を慨嘆する前に、先づかの「小説に對する首都の勢力」の消長と云ふことを考へなければならぬ。

以前は小説とさへ云へば、何でも大抵東京の生活を中心の舞臺として書いたものである。從つて作家が東京に對する知識と趣味との上に重きを置かれたことは非常なもので、時には東京人の風俗、習慣、氣質、言語等に通曉すれば、その點に申分さへなければ、唯だそれ丈けで小説家たるの素養ありとやうに考へられて居た位である。而してまた東京の生活と云ふが中にもとりわけ作家の興味と經驗とを有しなければならなかつたのは、社會の不潔なる一方面なので、小説家と云へば、其言葉を聞いた丈けでも、何かあまり

品のよくない修業を積むだ人を聯想した。尤も、首都の勢力を尊重する以上、とりわけ最もよく其生活上の特色を發揮して居る暗黑面に通ずると云ふことが、作家に對して要求されたのも餘儀ないことではあるが。

「東京の小說」に於ては、會話なんかも、第一にそれが東京語として不純なところがあるかないか、それをやかましく吟味した。書く方でも讀む方でも。太しきに至つては、東京語として瑕のないと云ふのを、直ちに上手な會話と心得て居た田舍者さへ少くはなかつた。天外子の小說は、自分はあまり好きの方ではないが、玄かし、子の小說を難ずるに、その會話が田舍臭いと云ふのを以てする人達には同意することが出來なかつた。天外子は決して會話の拙い方の作家ではないのである。餘事は偖て置き、今日ではだいぶ時勢がかわつて來た、大にかわつて行きつゝある、舞臺を田舍の生活に取るものゝ漸

く增して來たのと共に、會話や風俗などをも寫實的にやつてのけようと試みる作者も現はれて居る。またよしや標準を、東京生活の表現にとるとしても、少し位、それに田舍臭いところが伴ふのは苦にすることがなくなつた。つまり從來の如く、作家の主要なる努力を、所謂「小說修業」以外に用ひよう、用ひなければならぬと心附いたのである。而してかの「小說に對する首都の勢力」は日一日と減退して行く。

自分は大體より見て此の如き時勢の推移を、寧ろ慶ぶべき事柄であると思ふ。成程此「東京の小說」より「日本の小說」へ移り行く間には、稍やカルティヴェーションの不充分な趣味を混入し來るので、多少過ぎ行くものに對する愛惜の情が起らぬでもない。けれども兎に角、從前のやうに「東京の生活」「江戸の趣味」、もしくは又、ある特殊の方面に對する經驗や智識やが、小說作

家たるべき資格を第一に規定するものゝやうに考へられて居た過去に比しては、近來の趨勢は慥かに向上の一歩を轉じたものと云はねばならぬ。

西洋のことはまだ一向調べて見たこともないが、どんなものであらうか。英吉利や、佛蘭西や、獨逸や、露西亞などでは、凡そ如何なる程度まで首都の生活に對する、生活の形式に對する智識が作家に必要とせられて居るものか。尤も、巴里の生活などは、大陸作家に取つてある一種の意味を以て居るやうであるから、從つて巴里を大陸全體の首都と見出てると、つまり我が東京は日本丈けの巴里と解釋されないことはない。が、それにしても巴里の生活が大陸作家の興味を惹くのは、日本の作家が東京の生活に對する場合のやうに單に生活の形式にのみ關するものではなからう。何れにせよ、從來我が明治の小説はあまりに多く首都の勢力に支配されて居た。而して今日其勢力の漸

く減退し行きつゝあるのは賀すべきことである。

ところで此賀すべき現象に伴つて、もしくはそれに原因して色々また賀すべき事柄が起つて來て居る。心附いたまゝの順序を追うて云へば、まづ其第一は小説家が所謂小説家らしい人でなくとも、つとまるやうになつたことである。換言すれば作家の閲歴經驗なるものは、それが如何なる方面に存しようと構はぬ。商人は商人としての生活より獲たる觀察を基礎として、其範圍内に想を構へ、學者や教師は、その學者としての、また教師としての交遊なり周圍の境遇なりを材にとり、學生は學校を、勞働者は工場を、軍人は軍隊を、貧乏人は貧乏を病人は病氣を描く、描けばいゝと云ふことになつた。要は唯だ是等の種々なる觀察を通じて生きたる人生の實相に觸れゝばいゝのである近頃になつて所謂毛色の變つた小説の少からず出て來るのは此推移に基いて

居る。第二には右の如く小説と云つたところで、何も藝者や女郎が出なければならぬと云ふわけでもなく、また若い男と若い女とが同情し合つたり、慰藉し合つたりするものとも限らなくなつた結果は小説の讀者範圍が少からず擴張された。しかも其擴張された中には、從來一種の偏見からして小説なるものを卑み斥けて居た階級を含むで居る。例令へば學者とか、教育家とか、宗教家とか云ふやうな。で是等の階級をして、ともかく日本現今の小説に近かしむる爲めに、與つて大に力あつたものは、所謂小説家らしからぬ小説家の代表者たる漱石先生の如き是である。大學の先生たる漱石氏が自ら小説に筆を染むるに至つたことは、其作品の性質如何はしばらく措き、其事件其物が已に小説の社會的地位を高むる上に多大の貢獻をなしたるもの。後の明治小説史を編まむとするものの決して見落すべからざる事柄なのである。「小説

に對する首都の勢力」の衰微に伴ふ第三の慶ぶべき現象としては、作家が一般に外國文學の影響を被むること漸く增して來たこと、或は自ら進むで其影響を受けようとする努力の增して來たことである。今の風葉、秋聲、春葉等紅葉門下の所謂藻社諸子と以前の硯友社諸家とを比較して見れば、此經過が最も明らかに表はれて居る。畢竟此處では「東京の小説」からして「日本の小説」となる爲めに「世界の小説」が參考されて居るのである。慶ぶべき現象はまだ〳〵外にいくつもあるだらうが、今直ぐに漏れなく數へ立てることは出來ぬから是丈けにして置く。

序でを以て云ふの觀はあるが、自分は元來江戸趣味なるものをあまり感心しない。それなら嫌かと聞かれると、然り嫌だと答へても差支ない。尤も嫌は嫌だが、理解し得ないことはない。聞いたこと、見たことのない風俗や習

慣に對して趣味を有しよう道理もないが、一應其事其物の曰く因緣を聞いて見ると、大抵は、成程江戸兒と云ふ、鯉の吹流し見たやうな人種の好きさうなことだと合點は行く。合點は行くが、しかしそれは「成程」と合點したまでゞある。嫌なことは依然として嫌なのだ。そして江戸ッ兒と云ふ人種が更により多く嫌なのだ。

少くとも文學者としては、江戸兒から大文學者が生れようとは考へ得られぬ。ともすれば、大船にのつた氣で居れの、奇麗さつぱりと思切つたのと早呑み込みの、「うすッぺらな」ひやうきんな、執着心や執念の無い江戸人に、善人位はあるかも知れぬ。大文學者があつたらば、それはなにかの間違である。

江戸趣味の中心生命となつて居るものはユウモアであると云ふ。ユウモアの趣味を無價値とは云はないが、しかし、當分のところは多少ユウモアの趣味位は犧牲にしても、かの薄ッぺらなひやうきんな江戸氣質と云ふものゝ束縛から、文藝を解放しなければならぬ。從つて此解放をなす爲めには、自然の勢を手傳つてゞも或る程度までは、「小說に對する首都の勢力」を驅逐する必要があるのだ。

由來江戸人と云ふ人種は物を眞面目(シリアス)に考へることも、感ずることも出來ない厄介な人種である。彼等は洒落に一寸生きて居る氣なのだ。『ファウスト』のやうな、『神曲』のやうな嚴肅な題目に對しても、彼等はやつぱり之を洒落に取扱はうとする極めてシャクに障る人種である。

去かし大勢の推移は羅馬帝國を北方の蠻人の手に委ねた如く、東京の勢力は日一日と我々田舍者のものになりつゝある。我々は此勢に乘じて、一擧に

かの江戸趣味なるものを根底から覆へして仕舞はねばならぬ。われ〳〵は野蠻人である、去かし新日本の大文學者は、どうしてもわれ〳〵野蠻人の中より出るのだから仕方がない。

——文藝雜話終——

明治四十年十一月十七日印刷
明治四十年十一月二十日發行

(定價金五拾錢)

著作者 生田弘治
發行者 中根駒十郎 東京市麹町區土手三番町二十七番地
印刷者 藤澤外吉 東京神田區仲猿樂町四番地
秀光社活版所印行

發行所 東京市麹町區土手三番町二十七番地 新潮社

不許複製

早稲田大學
學習院教授　文學士　長連恒先生著

源氏物語梗概

源氏物語は啻に平安朝のみならず、古今を通じて我國第一の小說也。優婉豊褥、含蓄窮りなきの大字を以て、社會の表裏を洞察し人情の秘鑰を把持し驕奢淫柔の極に達せる平安貴族の生活を寫して、生彩奕々錦繡の目を射るが如し。然りと雖も尨然たる大帙、之を讀破すること容易にあらざるは勿論、行文迂餘曲折を極めて、深き國文の素養ある者尚ほ其解し難きを憂ふ、著者之を慨して慘憺の經營を積みこゝに一卷の梗概を公にせらるよく原著を陶治融化して五十四帖の大綱を四百頁の間に收め描くに優麗簡潔なる時流の美文體を以てし一般讀書家をして遺憾なく原著の眞趣を咀嚼玩味する事を得せしむ

總クロース上製
表紙金銀色刷
定價金七拾五錢
郵稅金八錢

第貳編出來

▲萬朝報評　源氏物語は王朝時代上流社會の活畫にして本邦輕文學の精華なり正史の語り得ざる時代の潮流此書あるが故に正視さるべく當代男女性格の比較觀乃至婦人內心の解剖等亦是に據て知らるれど詞意婉曲にして叙述甚だ清沌なれば國文の蘊奥を究めし者に非ざれば容易に解するを得ず尤も「湖月抄」を初めとして之が註釋の書數多く出でたれど何れも訓詁註解に傾きて只煩はしき感を起すに過ざるより「源氏物語」の名徒らに高くして人は多く其內容を知らざるに至れり「源氏物語梗概」の著者はラムの「沙翁物語」の體に倣ひて此一大著作の內容を簡叙せるもの五十四帖の大作物を三百八十頁に約寫したる先づ嘆賞に値すべしとなす而も文字豊麗にして叙述簡明なれば讀者は是に據て容易に「源語」の內容に通ずるを得ん吾人は此書を以て有趣有益の書として讀書子に薦め且著者の勞を多とする者也

▲報知新聞評　源氏物語は其行文迂餘曲折にして國文學專攻の士さ雖も往々解釋に苦むの難句なしとせず、更に今人より之を見れば言語のとり分けて宮庭婦人の口語の餘みやびに失して意を捉ふるに苦むもの多々あり、且つや其章句接續の至難なるがため紫女か大自然の默示錄も一個神秘の呪文として彈むるの外なき憾なしとせず、況んや浩澣の大篇容易に讀破し得ざるをや、文學士長氏は斯道專攻の士にして深く之を慨し簡潔溫雅なる筆を呵して此浩澣の大著を僅々四百頁に縮寫せる其勞實に多とすべし、即ち氏は無鈷の金甌を鑄りてこれに清楚なる當代の裝飾を以てせられしといふべく清麗彩麗なる時代的行文は能く一千年前の紫女が鐵血を傳へて人生の妙秘を描出せり、要するに本書は單に國文學と言はず苟も文學を愛する士の是非一讀すべき價値充分なるもの也

空前之好評

早稲田大學教授 島村抱月君序　早稲田文學士 高須梅溪君著

乙女の祈

好評（三版）　口絵アケヤヤの絵葉　定價三十錢郵税四錢

米國文豪ロングフエロー作
エヴワンリゼン

多感多涙の青年諸子來りて玆に乙女の貞操の奈何に固くして、其戀愛の奈何に清きかを看よ。乙女、風姿楚々、容顔花よりも麗はしっ。不意の出來事の爲めに其情人と別るゝや、追慕の念堪へ難く、悲風慘雨多年其跡を追うて終に燈火青き病室に於て會す、而も情人の病重くして語を交ふること能はざる也。嗚呼是れ何等銷魂斷腸の事ぞ、梅溪、今其麗筆を揮うて委に乙女半生の哀史を叙す。景を綴る幽絶、情を描く悽惋、字々皆愁へ句々悉く泣く。讀み來りて紅涙の襟を霑すを覺えざらしむ。

極めて平明極めて懇切に說く和歌入門者の眞個の寶典

金子薫園君著

和歌入門

▶クロース金模樣最上製
定價金四拾錢郵税金四錢◀

此書は如何にしたらば、初學者に歌の咏み口が付くであらうと苦心して、極めて熱實に極めて平易に、さながら手を執つて敎ふるやうに解き示したものである。（中央公論批評）

若し蕉園の此書を讀んで和歌一首だも作り能はぬやうな人があらば、それは奈何なる書を讀むとも遂に歌の詠めぬ無能の人なり。要するに本書は初學者の必ず座右に置く可きもの也（中央新聞評）

大なる歡迎を受け再版忽ち賣切る卽ち訂正參版發行す

小詩國

金子薫園君著
和田英作君畫
岡田三郎助君畫

（第五版）
裝丁最優美
定價廿五錢
郵税四錢

新派歌集

▲新派歌壇に於ける薫園氏の位置は何人も知る所、てに云ふを須ゐず、其作詩彩高麗、秀艶花の如し、人皆諷誦して萬斛の奇香に醉ふ▲『小詩國』は氏が最近二三年來の作中の萃を拔けるものにして、所掲數百首、氏によりて獨り見るべき清新高雅の趣は、遺憾なく此集中に窺ふことを得べし▲附錄に『小紅集』あり、是れ著者の令妹英子女史の作を錄せるもの也。謙抑、名を售らざる此女詩人の作の、いかに纖麗幽婉なるかを看よ

薄田泣菫君序
蒲原有明君序

松山白洋君著

新體詩入門

新刊

洋裝金文字入
定價金四拾錢
郵税金六錢

▲新體詩の機運今まさに大に動き、青春の士爭うて之に趨ると雖も、未だ之を導き、之を敎ふる者あるなし。著者は青年詩人の尤を以て稱せらるゝの士、深く之を慨しこゝに此一卷を公にせらる▲新體詩は奈何にして起れる乎と云へる趣味多き問題に筆を起して次に作法に進み、構想は奈何にすべき乎、躰式は奈何にすべき乎等凡そ創作上の心得可き一切を網羅して、最も詳密に最も嶄新に而して最も懇切に說述せるもの也。

10/2/41

文學博士重野安繹先生序　日本文章學院編

文章新辭典

最新刊　總クロース製　定價四拾錢　郵稅金八錢

本書は古今の文學書類より、現時の文章に最も適切なる美辞麗句を抜き、辭典の體裁によつて之を分類せるもの也。初學の士一部を備ふる時は、論文と美文との別なく縱横章をなすことを得可し

特色

他にざる見る本事書能の

▲掲載せる語句は、皆出所正しきものゝみ也。
▲難解の語句には、一々親切に註解を加へたり。
▲讀み難き文字には、悉く假名を施せり。
▲まゝ故事を挿みて、其出所を明し略解を附せり。
▲毎節名家の短文を添へて以て模範となさしむ。

小栗風葉君　柳川春葉君
德田秋聲君　田口掬汀君　述

小說作法

新刊　全一冊大判美本　定價金三十五錢　郵稅金六錢

本書は現時我文壇に於いて第一流の大家と推さるゝ四先生が、いづれも實地の經驗に徵して、作法の眞の秘訣を說かれたる文壇未曾有の寶典也。尙ほ主として年少諸子の爲めに述べたるものなれば平易懇切を旨として毫も難解の憂あらしめず。何人も一讀して容易に小說創作の眞秘に徹し、自由に筆を揮ふことを得可し。附錄として「小說家たるの準備」を說く、小說家として將來の文壇に立たんとする人の必讀すべきもの也。

幻影

萬朝報記者　田口掬汀君著

（五版出來）紙數三百頁餘　四六版洋裝　定價四拾錢　郵稅金六錢

▲近時小説家として聲名嘖々たる掬汀君の短篇小説集也。何れも構想純潔、着想清新の佳作。いかなる人も之を讀んで興趣を感ずべし

▲幻影は小説の外、著者苦心の餘になれる美文、寫生文、評論文を輯めたる大文集也。新時代の文章を學ぶ人には、眞に絶好の模範也

▲奈何に大なる歡迎を受けたるかは第五版を發售せるにて知る可し

◎毎日新聞評　小説、美文、評論を集めて一卷とせるものなり、「片瀬川」の趣味多き「まぼろし」の美しき「密獵船」の壯快なる「孤棲雜記」の長閑なる、其の評論には美術論あり、文藝論あり、演劇改良論ありて、以て著者の多方面を見るに足る

◎報知新聞評　掬汀子が短篇小説及び評論文數十篇を合刷して一冊とせしもの、例のイヤミなきスラリとしたる間に氣力あり韻致ある筆、これを讀みて感興多し。附錄の評論は常識より成る意見ながら何れも奇警に讀るゝ所、著者が想と筆の清新に據る

新潮

▲新潮を見ずして新時代の文壇を語る可からず

本年十月十一月號に於ける重要文字左の如し以て内容の一斑を知れ

▲文學入門者の參考たる可く特に毎號掲載すべきものには

◎文藝講話（生田文學士）あり、

▲新時代の藝術として誇るべき小説には、

◎一夜（風葉）、下婢（花袋）、敗北者（青果）等

▲文壇を警醒す可き大文字には

◎現代の詩歌（記者）、自然主義の根本誤解等

▲海外名作を紹介するため、毎號

◎海外名著梗概の一欄を設く

▲新聞記者たり又は新聞社の内情を知らんとする人の爲に

◎新聞記者生活（松崎天民）を連載す

▲其他前月文藝史、甘言苦語、劇界漫信等趣味ある文字に富む

紙面の大半を開放して青年文士の馳騁に任し各種投稿を歡迎す

▲毎月一回發行▲一部十三錢郵税一錢、六冊前金七十八錢

▲見本贈呈＝希望の人は往復端書にて申込むべし

◉生徒募集——目下入學の好機也◉

特色

本院は通信教授法によりて文章講義錄を發行し、論文●小說美文●普通文●言文一致等の作法を教ふ▲講義親切丁寧を主とし毫も難解の憂なし▲修業一ヶ年何人も此間に於て能文の境に至るを得可し▲文章は毎月四篇迄無料添削す

文章講義錄

批評

▲『萬朝報』評　通信教授法により會員に頒つもの也、言文一致作法、美文作法、漢文評釋、實用修辭學其他の講義何れも新案の說述法を應用して、丁寧懇切に說きたれば初學文章に志ある者には、よき手引として推すに憚らず。

▲『秀才文壇』評　通信教授法により文章の作法を教ふるは、日本文章學院あるのみ。今其講義錄を見るに、平易の辭を以て、懇切丁寧に、普通文美文言文一致文小說等の作法を說く、初學の士の講習に最も適するものと云ふべし。

申込所

東京麹町區土手三番町　日本文章學院

31
433

084819-000-5

31--433

文学入門

生田　長江／著

M40

DBA-0164